

高等学校の部 最優秀賞

酪農体験を通して得たこと

東京都立農産高等学校 食品科 三年

原田千絵

私は昨年の夏、北海道酪農体験に参加しました。周りの友人には「本当にいくの?」などと心配されました。私は将来「酪農家になりたい」、「牛が好きで好きでたまらない」という感情があつたわけではありませんが、北海道に行つて「酪農をする」という憧れだけで参加することにしました。私にとっての一番の心配事は北海道の酪農家の方の家に住み込んで働く、いわゆるファームステイをすることでした。三週間もの間、知らない人の家で、ましてや一人で生活するなんて想像もつきません。しかし、一度北海道に行つて「酪農をする」と決めた私にとって、心配な気持ちよりも行つてみたい気持ちの方が遥かに上でした。

実際の酪農体験は辛い事もあつたけれど勉強になることばかりでした。私の仕事は朝の五時半から始まります。まず、子牛十一頭の水と餌やりです。一頭一頭餌をあげる量が違うので間違えたりしないよう初めは大変でした。その後は子牛小屋の床掃除です。これも、子牛ごとに別々の小屋になつてるので急いで仕事をしないと終わりません。子牛が自分の排泄物ですべって転んでケガをしてしまわないように排泄物を掃除したあと、木の粉やおがくずを敷いてあげます。この

時も子牛の目に入つてしまわないように、注意を払うことが必要で慣れるまでは大変でした。この仕事を搾乳の時間までやるのです。初めの頃は朝だけでは終わらず、搾乳後も残つた仕事をすることがしばしばありました。子牛小屋の掃除の次は搾乳の手伝いです。私がお世話になつた中標津の千葉さんのお宅では一日二回、朝と夕に搾乳を行います。搾乳での私の仕事はデッピングという牛の乳頭の消毒作業でした。デッピングをしないと、牛乳に入る菌の割合が多くなり出荷できないのです。しかし、この作業が私にとって一番の苦労となりました。デッピングは消毒液をつけてから一頭一頭の乳頭を拭いていくのですが、牛によつては人の手の形や感じが分かるらしく、私が拭くと暴れてしまい、最後まで私一人で拭けなかつた牛もいました。足を蹴られてアザができてしまうこともあります、とても痛かったです。

また酪農実習中には、命に触れることもありました。ある日、これから夕方の仕事の始まりだと準備して机の上に目をやると、牛の死亡届が置いてありました。その時はただ「こういう届も出さなくちゃいけないんだ」と思つただけでした。そして、いざ子牛小屋の掃除を始めようとすると、一つの小屋だけ空なのです。一緒に仕事をしていた子に聞いてみると、「死んじやつたらしいの。」と返つてきました。その牛は、子牛の中でも一番私に懷いていて、とても可愛がつていた牛でした。その時、私はとても悲しくて必死に涙を我慢して仕事をしました。夜寝る前に、おばさんに聞いてみると、その子牛は生まれつき体が弱く、風邪をこじらせて死んでしまったといいます。私が切ない顔をしていると、おばさんは「強い

「ものが生き残る世界だからね。」とだけ私に言いました。次日もぽつかり空いた小屋を見るのがとても辛かったです。そんな私の励みとなつたのが、牛の出産、新しい生命の誕生でした。牛の出産に立ち合つたのは初めての経験です。この時、私は家の中で休憩中でした。その家の中まで母牛の聞いたことのない鳴き声が聞こえてきました。私は急いで牛舎へ行きました。すると、すでに子牛の前足が出ていました。今までテレビで見たことはあっても実際に見るのは初めてなので、とても衝撃的でした。そのあとも母牛は立つたり、座つたりを繰り返し、三十分程かけて子牛が生まれました。羊膜をかぶつっていた子牛の体を母牛は一生懸命なめていました。誰からお産の方法を教わったわけではないのに、母牛は子牛を産みしつかりと世話ををするのです。その光景に言葉にならない感動を受けました。これが命の繰り返し、営みというもののだと感じました。しかし、その生まれた子牛はオスだったので、一ヶ月間もすれば別の農家に引き取られていくといいます。人間で考えたら、お腹を痛めて産んだ子どもを周囲の都合で引き離されていくわけです。私は胸が締め付けられる思いになりました。でも、それが家畜であり、それを生産することが酪農家なのだと分かりました。

そして酪農体験を通して得た大きなことは、曖昧だった進路について決心することができたということです。畜産の知識や酪農家の心構えなどを学べる大学に行きたいという明確な目的ができました。牛を愛玩動物と同じように見ていた、扱つていた私にとって、酪農家になることは簡単なことではありません。実際に体験した牛の死より、もつと残酷なこと

も待ち構えているのかもしれません。そして、今酪農家は減少傾向にあります。それに伴い、餌や牛乳、バターなどの畜産物の高騰が騒がれています。それでも私は自分自身で食料を生産し、命の繰り返し、その営みに近くで触れていたと思つたのです。そして私のような食べ物に無頓着な人達に、命の上に成り立つ生産活動とその重みを少しでも伝えることができる、こんな素晴らしい職業はないと思います。夢を叶えるために、これからもたくさんのことについチャレンジしていくたいです。

高等学校の部 優秀賞

東京都立王子工業高等学校 総合技術科 四年

有賀伸一

私の学校は、今年度で閉校になります。

長い学校の歴史で、私達が最後の卒業生となります。この四年間の学校生活では様々な体験をしました。また、昼間は働き、仕事の厳しさを体験しました。学校では、電子工学の技術を学び、危険物取扱者の資格を取得し、ボランティア活動などにも取り組みました。

この定期制課程の学校に通い、本当に良かつたと思います。こんなに学校が楽しく感じられたのは、この高校が初めてで

す。

一年生の二学期に、工業高校生の「生徒研究成果発表大会」に初めて参加しました。

地球温暖化防止の環境活動として、雨水をタンクに貯め、それを撒き、気化熱で気温を下げる散水キャリアカーの製作を発表しました。発表会は全日制課程の生徒がほとんどで、定時制課程は僕達だけでした。僕達には制服が無く、実習服での発表となり、他の高校生とは雰囲気が違い、とても緊張したことを覚えています。雨水を如雨露（じょうろ）で撒い（ま）っていましたが、意外にも重く、雨水を効果的にどう撒くかを考えました。不要となつた椅子をガス炎で切断し、車輪を付け、タンクを載せ、広く雨水を撒くためのパイプに、等間隔に穴を開けた散水キャリアカーを作りました。一号車の製作から始まり、散水の機能を工夫した三号車まで、機械科工場で二週間に渡り製作しました。完成した散水キャリアカーを会場に運び、発表会に臨みました。

結果は、他校生徒のプレゼンテーション発表には及びませんでしたが、多くの方から拍手を頂きました。この体験は、ものづくりの第一歩となり、ここから校外での活動へ参加する挑戦が始まりました。

二年生で、日本機械学会主催の「風に向かつて走るウインドカーボンテスト」に一人で参加しましたが、結果は惜しくも四位でした。

この翌年には、友人と二人で参加しました。

私は初戦で敗退という結果でしたが、友人が見事に三位に入賞しました。そして、三年目の挑戦に向け、最後の夏休み

に、機械工場でアルミを削り車体を製作、走行テストを繰り返して、大会には四人で参加しました。

大会は、全部で四十四台が参加していましたが、私は第三位に入賞でき、他の友人も優勝と第四位を獲得しました。感動的な体験をすることが出来て、とても嬉しかったです。

こうした学校生活の一方、私は昼間は働き、二つの職業を体験しました。

高校に入学してから間もない頃、友人の紹介であるスーパーのレジ部門に入れて頂きました。ここはお店の中で一番お客様と接する部門で、服装や態度に気を遣い、尚かつ、商品やお金の扱いに細心の注意を払う大変な仕事でした。その中でも、一番苦労したのは、一緒に働く従業員の人達との人間関係を築くことでした。遅刻や無断欠勤などは論外で、そんなことをしたら信頼も何もありません。雪の降り積もる十二月に、私は一度遅刻してしまい、レジのチーフに怒られ、パートの人達に冷ややかな眼差しで見られたことを、二年以上経つ今でも覚えています。私は一年間働いたこのお店から、働いてお金を貰うという事の意味と大変さを教えられました。その後半年後、高校二年生の二月、やはり友人の紹介で施設の床掃除の仕事をさせて頂くことになりました。今も、この仕事を続けています。この仕事は、スーパーのそれとは内容も作業もまるで違い、仕事の手順とコツを覚えるまでは悪戦苦闘でした。汚れた床を綺麗にし、お客様に引き渡す際の仕上げには、プロの仕事が求められて大変でしたが、今ではこの仕事を体験出来たことを誇りに思います。

その他に、学校生活を通じ、様々なボランティア活動や地

域活動に参加しました。

学校で毎年行つてはいる「夏休みわくわく工作教室」で、地域の小学生などに「電子オルゴール」の製作の指導をしました。小学生の半田ゴテさばきはとても上手く驚きました。

工作教室では、付き添いのお母さん達にとても感謝されました。また、近隣の自治会の夏祭りに参加し、自治会の会場の準備や模擬店のフランクフルト販売の手伝いを行いました。

祭りの終わりに、自治会の会長さんから、最後となる感謝の言葉を頂き、ちょっと寂しくなりました。今年で学校が閉校となりますのが、学校周辺の地域の子ども達と触れる交流活動が、地域の人々の記憶に永く残つて欲しいと思います。

そして、大切な思い出は、第一回の東京マラソンのボランティア活動の体験です。メイカル・ボランティアとして、友人と二人で参加しました。大会当日は、冬の雨が降り、待機時間が長くて足が凍えてしましました。走者の第一陣が来た時はとても緊張しました。日比谷の街頭に設置されたテンントの中に、次々と助けを求めて来る気分の悪い方や、故障者の案内をし、救急車での搬送も手伝いました。中には外国人の方もいました。足の故障などで途中棄権したランナーを、搬送バスまで誘導し、ゴール地点まで無事送り届ける手伝いもしました。

この体験では、実際の救護活動を行つた緊張感が、今も貴重な思い出となっています。

この四年間は、必死に働きながら仕事と学校生活とを両立してきましたが、辛くとも、もう駄目だと思ったことは一度もありませんでした。

いろいろな経験を通じて、自分にとつて、とても充実していましたと実感できる四年間となりました。これから社会に出てもっと働き、貯金が出来たら、大学の二部へ進学したいと思っています。

夢から目標へ

東京都立忍岡高等学校 生活科学科 三年

萩原美保

舞台衣装デザイナー。これは中学生の時、いろいろ考えた結果、一番なりたいと思つた職業です。そのころ私は、服飾について興味があり、どんな職業に就こうか迷つっていました。憧れの舞台、宝塚歌劇団の「ベルサイユのばら」を観劇したことときつかけです。服飾系に進もうと考えていた私は、日常着のデザインしか頭になくてそういう固定観念の中に常々いたのですが、この時初めての世界に触れて、一瞬で視野が広がりました。舞台はフランス、時代は十九世紀、そして宝塚独特のきらびやかな世界、私は絶対にここの衣装スタッフになろうと思いました。そんな理由から高校も専門学科の家庭科のある忍岡高等学校に入学しました。

夢いっぱい高校に入学したのですが、実際は思ったよりも地味で大変な仕事だと痛感しました。細かい作業が多く、きれいに仕上げるためには、一つ一つ手を抜かず丁寧に作業工程をこなしていく根気のいる仕事です。その他にもデザインをするにあたつての下調べやデザインなどの表現の仕方、

それを形にする創造力、作ったものを色々な人に知つてもらうPR力など、様々な授業を通して学ぶ事ができました。

一年生の時には、基礎からきちんと教わり服飾の大変さと面白さを見つけました。想像よりも地味な仕事で、舞台で輝いて見える衣装とのギャップに驚きました。しかし、やつていくうちに、丁寧に作つていつて出来上った時の達成感と嬉しさがやみつきになり、どんどんいいものを作ろうという創作意欲がわいてきました。二年生ではパンツスーツを作つたり、ファッショショニーに出たりしました。難しいものも作れるようになつてきたので、さらに面白さが分かるようになりました。少し変形をしてみたり、自分が求めているシルエットがどうしたらできるのかが分かつてきて凄く楽しくなりました。またファッショショニーで人に観てもらうために、发型、アksesサリー、メイクなどトータルコーディネートの楽しさを見つけて、もっと深く服飾を学んで表現したいと思うようになりました。三年生の今、私はこの学校に入学して良かったと思うよりも充実した学習をしています。PR力向上のために、プレゼンボードやデザイン画、レポート、実物など様々な方法でのPR方法を学びました。課題研究では、自分の好きなテーマでどんな研究をしてもいいので、楽しく取り組んでいます。大好きな映画をテーマにワンピースをデザインし、役別に衣装を分析してレポートにまとめたりしています。

自分のデザインした洋服が思い通りの形に出来るようになつた嬉しさは言葉にはなりません。そして、それを少しでも色々な人に見てもらえる機会ができたことが、キャラクターを理

していきました。想像よりも地味な仕事で、舞台で輝いて見える衣装とのギャップに驚きました。しかし、やつて

それを形にする創造力、作ったものを色々な人に知つてもらうPR力など、様々な授業を通して学ぶ事ができました。高校に入つてから、中学校の時と夢への思いが百八十度変わりました。夢が変わったのではなく、見方が変わり色々な方向から衣装デザインという職業について見られるようになり、さらにやりたいという気持ちが高まつたということです。

目標を叶えるためには、一つ一つ小さな目標を立てて達成していくことが第一歩だと私は考えています。そのためには、今、何が出来るか？ その答えの一つとして、今、沢山の舞台を見て刺激を受けています。映画、音楽のプロモーションビデオ、テレビなど様々なものから活かせるものを吸収しています。人が印象を決めるのは最初の四秒と知つてから第一印象が大事だと気付き、「ファッショショニメー」ジ」というものがとても大切なことで深く勉強していくことを決意しました。さらに服飾史などを勉強して、時代や国別の文化も勉強する必要性を感じています。衣装デザインの勉強には、そのような豊かな知識・教養が不可欠と感じ、目標を決めたときよりも課題が増えていきますが、とても大切なことです。一生懸命理解し身に付けてデザインに活かしていくつもりです。

将来の夢、それが将来の目標に変わった今、私は新しいステップアップのために服飾系の専門大学に行くために頑張っています。目標を叶えるため学びたいという気持ちをいつまでも忘れず、眞面目に取り組もうという決意をし、今までの高校生活の思いや成果を全て絡め込んで進んでいこうと思います。

中学生のころから変わらないこの目標を追いかけて達成す

るため、何があつても自分に負けないで頑張つていこうと思
います。

サービスに求められるもの

岩倉高等学校 運輸科 三年
城 本 猛

今になって考えてみると、とても愚かしいことなのですが、私はサービスというものは、それを施す人間がその分野の仕事をしていればよいものであると解釈していました。しかし、高校での授業や職業体験、そしてアルバイトの経験を通じて、この考え方は全く違っていたことに気付きました。

高校一年生のときです。自身の考え方には変化が始めた

のは、旅行実務という旅行に関する法律を学んでいく間でした。旅行に携わる仕事というのは、私が実際に旅行を取り扱う店で受けたサービスである「チケットを売る」、「旅行先の観光案内をする」という作業だけだと思っていました。ところが実際には、旅行に関する様々な法律を学ぶことをはじめ、旅行プランを作成・販売したり、旅行者一人一人に合わせた旅行地や宿泊先を紹介したり、またこれらの他にも実際に多種多様な仕事をしなければならないということが分かつてきました。しかし、このおかげで人に納得されるサービスをすらには、その分野の知識はもちろんのこと、それに付随する知識も兼ね備えていかなければいけないということが学べまし

た。

更に、私の考えに大きな変化を与えてくれたのが、二年生のときに始めたアルバイトでした。この店に入り、いろいろなお客様と接する仕事を行なう上で、最初に教わったことは「笑顔で奉仕する心をもつて働く」ということでした。その後に実際の仕事の知識を習ったのです。ここでも私は、考えが間違っていたことに気付かされました。人に喜んでもらうためには、仕事の内容以前に大切なことがあります。自分が喜んで働いていなければ、お客様に良いサービスが提供できなくなってしまうということです。実際、仕事を進めていく上でも、自分が喜々として働いていればお客様も多少のミスなら許してくださいたり、同じ仕事をしてもより喜んで頂けたりすることがありました。

また、仕事に慣れても、常によいサービスを提供するための努力をし続ける姿勢も大切であることを学びました。売り上げをより良くするためにはどういう売り込み方をすればよいか、どういう店作りをすれば、またお客様が店に来てくださるか、ということを常日頃頭に置いて実践してみることも大切だったのです。ある日、目玉商品を販売する機会があり、売り込む言い方を試行錯誤しながら接客していました。しばらく経ちだんだんとコツが分かつてきて、その商品が売れるようになつたときには、言い様のない充実感を得ました。

もう一つ、サービスに対して考えが深まつたのは、鉄道会社の駅で職業体験をしていた時でした。夏の暑い日に構内を見回りしていく時に、とても具合の悪いお客様がいらっしゃいました。助けようにもどうしてよいものなのか分からず、

社員の方の所へ急いで知らせに向かいました。すると、とて
も素早くお客様のもとへ駆けつけ、応急処置をし、救急車を
呼ぶところまで迅速に対処していました。私自身は、それを
手伝い、お客様に声をかけることくらいしかできませんでし
た。しかし、そのときの社員の方の姿を見て、「これがサービス、奉仕をすることの本質なんだ。こういう
立派な対応ができるよう頑張っていきたい」と強く感じました。また、お客様に満足してもらうサービス
をするには、今、目の前で起こっていることを目で見て、心
で受け止め、頭で考えてそれを瞬時に実行することが必要で
あるのだと学びることができました。学校の勉強とはまた
種類が違う、人生の勉強ができた気がしました。

この変わってきた考えが確かなものであるということを旅
行に出かけた時、サービスを受ける側として感じる出来事が
ありました。その日、私は旅の拠点にするために、ビジネス
ホテルでお世話になることにしていました。初めて行く土地
ということもあって、どこに土産物が売られているか、どこ
の名所から見ていくと効率がいいかというのが分からず、そ
のホテルの方に相談をしてみました。すると、その方は場所
をただ教えてくれただけでなく、現地の人でないと分からな
いような隠れた名所まで含めたプランを考えてくれました。
ここまでしてくれとは考えていなかつたので、とてもあ
りがたかったです。そして、お客様の求めているもの以上の
サービスが提供された時、お客様はその会社に感謝し、より
信頼するようになるのだと客の立場から感じました。

現在は多種多様なサービスがあり、更に多くの需要があり
ます。しかし、どのサービス業であっても、求められている
ものは同じである、ということを学校や家庭生活で学ぶこと
ができました。それは、「サービスとはお客様と心を通わせ、
必要としていることを汲みとり、心・技（知識）・体全てを使
い瞬時に応え、喜ばせる努力をする」ということです。この
ことを私は求めていきたいですし、自身もこのことがしつか
りできる社会人になれるよう日々学び、頑張っていきたい
と思います。

高等学校の部 佳 作

将来の夢

東京都立農産高等学校 食品科 二年

佐 藤 久 雄

私の将来の夢は、小さい時にも一度夢みたパン職人になる
事です。それは、近所にあったパン屋のおじさんがとても優
しく、いつ行ってもおいしいパンがあつて、パンが好きにな
り、そして憧れるようになったからです。その夢を叶えるた
め、この農産高校で色々な事を学びたいと思って入学しまし
た。

一年生では早速、穀類加工の授業で、パンを製造しました。
初めてのパン製造実習はコッペパンで、生地を手捏ねしてい
る時、先生に「将来パン職人を目指したら良いよ。」と誉めら
れた時はとても嬉しかったです。座学の授業では、何故生地

が膨らむか、パンの発酵中はどんな化学反応が起きているか、食品の製造には、どんな微生物が関わっているか等、普通科の授業とは違った、幅広い専門的な事を学べるので、私にとても充実した毎日でした。そして、一年生の終わりにあつた類型選択では、食品デザイン類型、食品サイエンス類型の二つのうち、パン等の製造原理や、その流通について学ぶる、食品デザイン類型を選びました。

しかし、この食品デザイン類型での実習は来年の三年生から始まり、今年は穀類加工の実習がないので、少しでも勉強できるようにと、この春にパン屋でアルバイトを経験しました。パン屋の製造現場では、レジ打ちやパンの品出し等を任せられました。現場での衛生管理や接客等、学校で学んでいる事と共通の事はもちろん多くありますが、また違った知識も得られたと考えています。

そしてもう一つ、アルバイトを経験して分かった事があります。確か、中学三年の高校受験前でした。あるニュースを見ました。それは大量の食品が誰の口にも入らず捨てられる事実でした。その時、「どうして作るだけ作つておいて捨てるという無駄な事をするのだろう」と不思議に思いました。日本とは違い、世界には今日食べる食事もままならない生活をしている人達がたくさんいるという事を知っていたので、矛盾を感じたからです。しかし実際には、今までニュース等で聞くだけで、そういった現場を体験していませんでした。今回、アルバイトを経験した事によつて、やつとそれを現実として目の当たりにする事になつたのです。

本当に、毎日たくさんのゴミ、つまり売れ残りのパンがで

ます。この対策として一番良いのは、売れ残りがでないよう調整することでしょう。学校の給食等もそうですが、いつも余るのなら作るのを八割に抑えるなど調整をする。そうする事で、食べられる食材を捨てる必要もなくなると思います。でもそれは、店を経営する側からすれば、無謀とも言えるくらい難しく、理想論だという事が、アルバイトを経験して分かりました。それは、日によつて売れ残りの量や品物が違うし、そんな事をすると、収益が落ちてしまうかも知れないからです。

それでもこういったことはパンだけに限りません。全国で誰の口にも入らずにただ捨てられていく食べ物を世界中の恵まれない人達に分ける事ができたら、こんなに素晴らしい事はないと思います。実際に、閉店後、店頭に残つているパンを無駄にしないで、人の役に立てる活動をしている方がいるそうです。多分知らない人がたくさんいると思いますが、公共機関等が主体となつて活動を推進したりしているようです。そしてこの活動の事を、もっと色々な人に知つてもらい、将来はこのような活動に協力できるパン職人になれたら、と考えています。

私は、高校卒業後、就職しようと考へています。確かに、このまま進学して大学、もしくは専門学校に行き専門的な事を学ぶという道はあります。それは、将来就職するという事では変わらないけれど、それまで学ぶ量や質が違うので、どれを選ぶかによつて、大きな分かれ道になると思います。しかし私は、早く家族に恩返しをしたいという意味でも、就職を選択することに決めました。

そして、無事就職したら、その就職先でさらに知識、技術を身に付け、将来は、地元の人達に愛されるパン屋を經營したいです。

パン職人になり、自分のお店を持つこと、そして、世界中に貢献して、なるべく多くの人に幸せになつてもらうこと、そのどちらも困難な道のりで、決して簡単なことではありません。けれども、これが今私の考へている将来の夢です。

酪農体験を通して

東京都立農産高等学校 食品科 二年

鈴木 晴香

教科書でいくら知識を頭に詰め込んでも、実際に見て触れるのとは違う。感触や匂いだって新鮮、本物だ。そんな、自分の身体で体験することが大切だと感じた三週間だった。

七月二十五日、一日一便しか飛び立たない飛行機に乗つて、私は東京から北海道中標津空港へ降り立つた。これから酪農家の家のでの三週間のファームステイ。期待で一杯だった。この酪農体験実習は二年生の夏休み、希望すれば参加することができる農産高校ならではの実習だ。私は小さい頃から動物や自然が大好きで、北海道への憧れから将来は酪農家になりたいと願つた事がついた。父から「酪農なんてきつい仕事、お前が耐えられるわけないだろう。そんなの夢物語だ。」と反対されつつも、高校選択の際、農業という面白そうな科目が学べ、酪農体験もできる、農産高校を希望したのだ。

私の酪農に抱いていた想像と現実は違つた。牧草に寝転がつて牛と触れ合いたいなんて、淡い幻想を描いていたが、實際には早朝の牛舎の掃除・搾乳が終わると、家の掃除、朝食、その後はまた昼の作業と、疲れたとも言つていられないよう忙しさでそんな余裕はなかつた。「そうか、遊ぶ暇なんてない。農家の人は一日中働いているんだ」男も女も皆そつだつた。観光の車窓から見る牧場の風景は一見のんびりしていて、憧れの地のようだが、実際の牧場作業は重労働で休む暇もない。また、身体一つを使う仕事だと思つていたが、相手の牛は商売道具であると同時に動物だ。常に注意を怠らず、考えながら臨機応変に対応しなければならない。私の幻想は簡単に崩れ落ちた。理想と現実は違うと親は言うけれど、まさにその通りだつた。

しかしそんな衝撃も含め、私にとつて感じたこと、考えたことは、楽しい・辛いに関わらず全て自分にとつて成長材料になるのだ。この三週間、本当に学ぶことが多かつた。ある時事件が起きた。牛の搾乳後、掃除をする際には周りに牛の糞が飛び散らないよう、そつと掃除をしなければならない。それを大袈裟に作業したせいで商品の牛乳に糞が混入してしまつたのだ。そして、「牛乳を出荷できなくて、悲しくて夜も眠れなかつた。あんた達は糞の入つた牛乳が飲めるかい?」とおばさんに叱られた。私は食品科の生徒である。学校では自分で製造したクッキー やジャムを製品として売つてているので、その気持ちが痛いほど分かつた。牛乳を出荷する生産者として生半可な気持ちで作業をする事は有り得ない。もし糞が入つた牛乳を出荷してしまえば、消費者を裏切ることにな

るし、信用を失つて最終的には家業が潰れてしまう。食品科で学んでいる「生産者としての心がけ」を酪農体験でリアルに感じた事件だった。

今回の酪農体験では、酪農の仕事を経験することが一番の目的だが、そのためには受け入れ先の農家とコミュニケーションを取らなければならない。一番基本的なことだが、一番大切なことだと感じた。今まで親戚以外の家にお世話になることはなかつたので、上手にコミュニケーションがとれるか不安だつた。しかし、受け入れ先の農家はとても良い方で、田舎のお母さんらしく厳しい面もあるが、明るくて優しかつた。冗談も言えて笑い合える。標準のお祭りのあつた夜、作業を早めに切り上げて遊びに行く時間を作ってくれた時は、嬉しくて涙が出そうになつた。お世話になつたおじさんとおばさんは、北海道でのお父さんとお母さんだ。誰に対してもそういうが、人とコミュニケーションを取るには自分の殻を破ることも必要だと実感できた。

私は小学生の頃まではおとなしくて、人と話すことは苦手だつた。だが、農産高校に入學して人前で話す機会が多くなり、今回の酪農体験でも色々な人と触れ合うことができた。

今では人と話すのはまつたく苦にならない。むしろ、話をする中で多くの発見ができ、より多くの人と接する機会をもちたいと願うようになつた。「何事も経験なのだなあ」と感じている。

そしてもうひとつ、私にとって印象的な出来事があつた。普段作業をする時はゴム手袋をしているので、素手で直に子牛に触ることはなかつた。ある時、作業の合間にゴム手袋

を外して触つてみると、手袋をしたままでは分からぬ、子牛の体温や毛の質感を感じることができた。私は、「生きているんだ」と今更ながら、子牛を愛おしく感じた。ゴム手袋をしたままでは、あれほど強い感情に襲われなかつたと思う。実際に触れて経験する・体感するということの重さを再確認できる出来事だつた。

私の将来の夢は、農業高校の教師になることだ。教師だなんて、中学生の時まではなりたくない職業ナンバーワンだつた。今まで糾余曲折があつたが、それも農産高校に入學して変つたのだと思う。良い友達と先生。私は本当に恵まれている。その恵まれた環境の中で、私は農業高校の教師を目指して、学んで吸収し続ける。私にとっての「学ぶ」とは、酪農体験で再確認した、実際に肌で感じ経験をするということだ。そうすることによって、勉強をするのが楽しくなる。理解が深まる。

私は学び続ける。内だけの勉強ではなく、どんどんアクティブに外へ向かってチャレンジしていく。自分自身のためにだけではない、未来の私の生徒たちのために。

「物を食べる」ということ

東京都立農産高等学校 食品科 三年

齊 藤 祐 衣

みなさんは「物を食べる」ということについて考えたことがありますか？

私は、中学生の頃まで「食べ物はあって当たり前、買えばいくらでも手に入る」と思っていました。そして食べきれないもの、好きではないものは残していました。しかし農産高校に入学し、自分で野菜を育てたり、食品を製造することにより、その考えは変わりました。

自分で野菜を育てた時に感じたもの、それは「命」です。畑に整然と植えられた野菜の葉が、サワサワと風に揺られている音を聞いていると、まるで話しかけられているようでした。私はその場で立ちつくし、ひしひしと命の大きさと尊さを感じていました。だから野菜を収穫する時は嬉しくなりましたが、切なくもなりました。自分が置かれた環境の中で大きく育つていく「命」：私たちはその「命」を摘み取つて食べています。つまり、「物を食べる」ということは「命を食べる」ということなのです。そのことに気付いてから私はできるだけ好き嫌いなく、残さず食べるということを意識するようになりました。休みの日、家にいる時は、お昼ご飯を家にある食材で作ったり、自分で食べられる量を考え、食べ物を残してしまわないようにご飯を用意して食べるようにしています。

今の時代、「物を食べる」ということに対する、多くの人は以前の私のように、少し無関心すぎると思います。「うちの子には『いただきます』を言わせないでくれ」と言つた親がいるとは有名な話ですが、みなさんはこれを聞いてどう思いましたか？私は共感しません。何故なら『いただきます』という言葉は作ってくれた人達だけにいう言葉ではなく、命をくれた食べ物たちにも言うべき感謝の言葉だと思うからです。

最近、少し気になることがあります。それは、周りの人気が『いただきます』を言わなくなつたことです。家でごはんを食べているときも、外食しているときも、周りで『いただきます』という言葉が減つてきているのか…。私が考えた理由として挙げられるのは二つです。一つ目はファーストフード店などが増えたことにより、食事が簡単にできるようになったことです。食事が簡単にできてしまふと、やはり心のどこかで「買えば済む」と思つてしまふのではないかと思います。二つ目は食糧自給率の低下です。食糧自給率が低下しているということは、作物を作ることころが減つていているということ。つまり、自分で作る機会がないから、食べ物の「命」を身近に感じることが出来ないのでないかと考えます。私は、実際に自分の手で野菜を作ることにより「命」を身近に感じることができました。ですから「命」を身近に感じるにはまず作ることが大切だと思います。そうすれば、食糧自給率も上がり、「命」を身近に感じる人も増えてくるのではないかと思います。しかし、本格的に作物を作るとなると、それは容易なことではありません。それなら家庭菜園など、小さなところから始めてみてはどうでしょうか。今は、家庭でも簡単に育てられる野菜が多く存在します。そういうものを利用して自分で作る、ということを体験してみてください。

そういう点では、私たち農業高校生は農業実習などを通して「命」と触れ合う機会が多いと思います。私たちみんなの命を支える命、それを育てる大変さ、その命、つまり食材を活かして食品を加工する難しさ、それにかかる時間と手間と

苦労を農業高校で身にしみるよう學ぶことができたことは、私にとって意識を変えるもとなる大きな経験となりました。たかが野菜、たかが肉と思つてゐる人もいるとは思いますが、人間と同じように命をもつてこの世に生まれてきた私たちです。そのたつた一つしかない「命」を、私たちは奪うことにより生き、生かされているのです。

私たちが生きるために、「食べること」は必要不可欠です。ですから、「命」を奪わないというのは私たちが生きている限り無理なことです。ならば、「命」をくれたものに対しての感謝の言葉『いただきます』を心を込めて言うべきでしよう。「もの食べる」：「命を食べる」ということを少し考え、その「命」を身近に感じる体験をしてみてください。そして、食べ物の存在がどんなにありがたいか、作物を作ることがどんなに大変か、分かつてくれる人が少しでも増えてくれることを私は願います。

動物や植物の「命」を食べて私たち人間は生かされていること、そしてそのことに感謝する心を忘れないでください。

私は農産高校で学んだ「命」の大きさや「食べる」ということの重さを、できるだけたくさんの人々に伝えていきたいです。そしてこれから先、高校を卒業し、社会人になつても農産高校で学んだことを忘れず、食べ物を無駄にすることのないように心がけていきたいと考えています。



50年後の三宅島

東京都立農産高等学校 農産科 二年

萩原 有翔

今、環境問題やボランティア活動が呼ばれています。環境問題では小さなことから大きなことまであると思います。小さなことでは、ゴミのポイ捨てや大人の人がタバコの吸い殻を火のついたまま捨てるという光景を時々目にしました。その中で一番自分の中に残つてゐるのは、中学生の時、踏切で止まつていた際に、一人の大人が火のついたタバコをポイ捨てしました。私は正義感が強かつた訳でもないのですが、靴で火を消しました。

その時、捨てた大人の人は私に向い、「お～偉い！」と言いました。私はその言葉を聞いてすごく悲しくなつたのと、怒りを感じました。その人が自分で捨てて置きながら、「お～偉い」と言われてもうれしさはありませんでした。大人自身が自分で捨てたたばこを自分で後始末するのが当然なのにといふ気持ちと、偉いという前に自分自身で片付けをしなよといふ気持ちだったと思ひます。

高等学校に進学する際、働きながら農業の専門を学べる農産高校定時制を選択しました。高等学校入学後、昼間は働き、夜は学校という生活を何気なく送っていました。友達もたくさんでき、楽しい生活でした。

そんな時、担任の先生から三宅島緑化プロジェクト活動の話を聞きました。三宅島が噴火をして、今まで生育していた

樹木がほとんどなくなってしまったという話だったと思いました。参加希望の生徒は申し出るようによく言われたのですが、自分では何気なく聞いて家に帰り父に話しました。その時、父は「絶対に行きなさい。そんな経験は今しかできない」と言われました。私はその時、どんな意味で父が言っているのか分かりませんでしたが、父が強く行くように勧めたので、次の日、担任の先生に参加申し込みをしました。

十一月二十二日、竹芝桟橋に担任の先生とあと一人の友達と三名で向いました。竹芝桟橋に着くと、都内の農業高校の生徒がたくさん来ていました。結団式が行われ、船に乗り込み三宅島に向いました。三宅島に向う船の中では他の農業高校の生徒と話をしました。農産高校定時制からは、男子では私一人だけの参加でしたが、三宅島到着前から友達ができました。

三宅島に近付くにつれて、火山ガス特有の臭いが船の中にも臭つてきました。

到着後、体を休め、着替えて植樹する場所に向いました。

バスで移動している時、三宅島の光景を見て驚きました。噴火により枯れてしまつた木々が倒れたりしていました。また、誰もいない異様な空氣や鳥の声も聞こえないような状況でした。植樹する場所に到着後、現地の方から話がありました。

そのお話を中で「皆さんが十本植えて、育つのは三本くらいしかありません」と言われました。十本中三本しか育たないのかと思ったのと同時に、三本育つかと考えたことを今まで覚えていました。その後、植樹が始まりました。急斜面の不安定なところに、固い土や火山石を掘りながら苗木を植樹を

しました。枯れた樹木をどかしたりしながらの手作業が半日続きました。植樹が終わり、全員で四千本の苗木が植えられたことを担当の方から聞くことができ、充実感につつまれました。それと同時に、五十年後には立派な樹木になつていていた。それと同時に、五十年後には立派な樹木になつていていたことを担当の方から聞くことができ、充実感につつまれました。その後、宿舎に戻り、他の高校の生徒と話をしました。同じような考え方をしている人がこんなにいるんだと思いました。

最終日は晴天に恵まれ、下草刈りをしました。鎌を持ち、下草刈りが始まりました。やつてもやつても終わらないと思いつながら作業をしていると、松の苗木が育つてているのを見つけました。その時、松の苗木が五十年後立派な樹木に成長してもらいたいなと思い、作業を続けました。作業が終了した後、担当の方からお礼を言わされました。私は逆にお礼を言いたくなっていました。それは、こんな良い経験をさせてもらえたのは、初めてだつたからです。その後、帰りの支度をするために集合場所に戻りました。乗船し、帰る船から三宅島を見て、「早く緑あふれる島に戻れ」と思いました。ゴミのポイ捨てやたばこのポイ捨て、そして、今回参加した「三宅島緑化復活プロジェクト活動」のなかで、大切なことを学べたと思いました。父がこんな体験は今しかできないと言つてくれたことも、すべてつながつてゐるように思いました。

環境問題やボランティア活動。個人の意識は大切です。それがと同時にあと五十年後の三宅島を見てみたい。こんな体験をさせてもらえてありがとうございます。心の中で言つてゐる私がい

インターンシップで学んだこと

東京都立葛西工業高等学校 機械科 二年

千葉 大可歩

私がインターンシップに参加しようと思った理由は、企業ではどういう仕事をしているのか、何をすればいいのか、具体的に知りたかったからです。

両親や先生から会社や仕事の話を聞いてもあまり実感がわからず、心のどこかで他人事のように思っていました。働くということがどういうことなのか、あまり考えることもありませんでした。そこで、先生の勧めもあって、今回の長期インターンシップに参加しようと決めました。

最初の頃は、夏休み中ということもあって多少気が引けました。しかも職場と家が遠く出勤時間も早かつたので、眠く体もだるかったのですが、この機会を逃したら次はないなど思つて頑張りました。しかし三日も経つと体も慣れて、朝早く起きるのが楽しくなってきました。

今回の体験では、学校で出来なかつた実習を色々させていただけました。会社の人たちにもやさしくしてもらい、とても充実した十日間を過ごすことが出来ました。辛いときもありましたが、周りの人たちの励ましや応援で何とか乗り切ることが出来ました。

仕事の内容は、ガス溶接やレーザー切断、曲げ加工やティグ溶接など、様々なことを体験しました。その中で最も興味を引いたのが電子ビーム溶接でした。アルミニウムを溶接す

る溶接法で、真空にして行うため、特殊な設備が必要なので、めったにお目にかかるない溶接法です。

そもそも、私がこの会社でインターンシップをやろうと決めた理由の一つが、この聞き慣れない電子ビーム溶接が一体どういうものなのか、パンフレットに載つていた解説などを読んでいくうちに、非常に興味が湧き、実際にこの会社の現場を見たいと思ったからです。

実際、電子ビーム溶接は見学しか出来ませんでしたが、実物が見られて満足しています。

今回のインターンシップで一番辛かったのは、アルミニウムやステンレス製品を仕上げる「みがき作業」でした。指や腕がとてもなく痛くなり、今までに経験したことのない疲れでした。三日間だけの作業でしたが、本当につらい経験をしました。

しかし、今回のインターンシップでは得ることが数多くありました。

痛くて、疲れて、辛い経験でしたが、終わった後の満足感は今まで味わつたことのない経験でした。また、会社という組織の中で職場の人達とうまくやつていけるかどうか不安がありましたが、大事なことは、一生懸命仕事をし、何事も受け入れようと努力することだと気付きました。

会社の方々には親切にしてもらい、質問等にも分かりやすく答えていただきました。感謝の気持ちでいっぱいです。また、この機会を与えてくださった先生方にも感謝しています。この経験を今後の学校生活や進路選択に活かしていくように頑張りたいと思います。

インターンシップで学んだこと

東京都立芸術高等学校 グラフィックアーツ科 二年

谷澤小春

インターンシップ最終日。今までお世話になつた会社の方が、最後のまとめのミーティングの時に言つてくれた言葉が、私はとても嬉しかつた。

「これからもアルバイトに来て欲しいくらいでした。」

今までやつてきたことが全部ひつくるめて認められたような気がした。

私は将来、高校を出たら就職しようとを考えていた。けれどそれはまだ漠然とした方向を何となく考えていただけで、自分にどんな仕事ができるのか、世の中にはどんな企業があるのか、また具体的にどうすれば会社に雇つてもらえるような人間になれるのか、何一つ確かな知識がなく、正直不安でいっぱいだった。

そんな思いを抱えながら、私は先輩のインターンシップの発表を聞いて、自分に機会があつたら行つてみたい、と思つていた。そこに、今回の技能習得型インターンシップ参加のチャンスを先生から聞くことが出来たので、かなり迷つたが参加してみることに決めた。迷つたのは自分の引っ込み思案な性格で、今、一流企業に出向いていつてしつかりやつていけるかが不安だったからだが、自分の将来について知つておきたいことがたくさんあつたので覚悟を決めた。職場の実際の雰囲気や、授業で習つていることがどれほど活かせるのか

ということ。行くからは、見るもの聞くものをできるだけ吸収してこよう。そう決意した。

私がお世話になつたのは、製版・組み版から印刷までを行う一流的印刷企業。はじめはただ緊張したが、だんだんその職場での仕事が、授業で実習してきたことも十分通用する内容であることに気付いた。ただ、それまでは授業としてやつていたことが、実際仕事として行われている現場を間近で見られたことはかなり新鮮だつた。例えばある雑誌の、ある一ページを作成するのに、学校の実習なら「作品」として作つてそれで終わりだけれど、職場ではそれは許されない。個人の作品である前に「商品」であるわけだから、ミスは絶対に許されない。会社の基盤はそこにあり、社内の至る所にミスをしないための約束事や標語が目立つっていた。流れ作業のよなスピーディさながら、一字一句の間違い、微妙な色合いの変化も見逃さない細かいチェック。

それらプロの仕事ぶりは、現場で目の当たりにしなければ絶対に見られないと感じた、凄まじい勢いのあるものだつた。他にも業界最先端の職場というのは、私にとって、とても新鮮味溢れるものばかりだつた。

私が会社でやらせて頂いた実習の中で、最も興味深かつたのが赤字の修正という作業。直すべき点がクライアントによつて書き込まれたメモ書きのようなものが赤字で、実際に世に出回る予定の雑誌の原稿で実習をさせてもらい、同じ仕事をしている隣の方に逐一質問させてもらひながら取り組み、職場の方の気持ちに一番近づけた瞬間じやないかと思つてゐる。私が修正作業をしたページを含んだ雑誌が発売された後、つ

いそのページを探してしまった。こんな風に自分が手がけたものが、もつともっとたくさん増えていつたらどんな気持ちになるだろう。より一層将来への夢がふくらんだ。

分かっていたはずのことを思い知られたり、さまざまに初体験をさせて頂いたりと、個人的にはとても実りのあるインターンシップを終えることが出来たその日に、会社の方がおっしゃつてくれたのが冒頭の言葉だった。私はあの一言でこの二週間、それどころか今まで学校で習ってきたすべてのことが無駄ではなかつたのだと思い、とても嬉しく思った。

インターンシップ以前にあつた就職の不明瞭さも、実際の職場を体を感じたことで漠然としたイメージがより確実なものになり、不安や焦りも軽減されて、目標への自信と勇気が湧いてきたように思つた。これからもこの貴重な体験を決して無駄にしないよう、自身の目標に向つて日々一步一歩努力していくこうと決意を新たにした。

最後に、お世話になつた会社職員、作業員の方々へ、感謝の思いを捧げます。



こゝに技あり——インターンシップに参加して——

東京都立墨田工業高等学校 機械科 二年

水 越 達 也

私は、日本の中小企業の技術力はすごいと思いました。機械加工については、私も学校の実習で行つてるので、一番興味をもつっていました。社員の方々の作業は、素早く的確であり、次々と製品の出来上がつていく様子は、これがプロの仕事なんだと、とても驚き、勉強になりました。

私は、旋盤を使っての製品作りはありませんでしたが、図面を頂き、金属を寸法通りに加工してみました。しかし一個目は、寸法よりも公差で髪の毛一本の十分の一のサイズである〇・〇一ミリ削り過ぎてしまい、失敗してしまいました。二個目からは寸法公差の範囲内に収まるようにすることができました。

仕上げ加工である手仕上げという作業は、機械加工では加工出来ない細かい部分をセラミックス製のヘラ刃物に研磨剤をつけて、加工面を光学顕微鏡で覗きながら仕上げていくものです。入社後一年間は、自分が使用する手仕上げ道具作りに時間がかかり、練習と失敗の繰り返しと聞きました。

実際の製品を仕上げるためには、さらに多くの時間と経験を積む必要があります。

今回特別に、この作業を体験させていただきましたことが出来ました。非常にうれしかつたです。その体験では、職人さんの仕事がいかに素晴らしいものであり、美しく仕上げる技能の

すぐさま実感しました。

最近の新聞やテレビ報道等で、国内の素晴らしい技術が、海外に流出してしまい、安い賃金のもとで行われる海外での生産が、日本の「ものづくり」を脅かしていると言われています。このような素晴らしい技術が日本になくなってしまうことはとても残念です。

確かに、安い給料では、私と同じ年代の若者は、就職したいとは思わないかもしれません。

しかし、インターナンシップで派遣された企業では、若い社員が多く働いています。それは、今、企業で頑張っている定年前の熟練工さんから、多くの技術・技能を伝承するために必要な人材だそうです。その若い社員が技術や技能を身に付ければ、企業の発展につながり、延いては、日本の技術の発展にもつながると思います。

「ものづくり」とは、プラモデルを組み立てるように簡単にできるようなものではなく、一つの製品と正面から向き合って、何度も失敗を繰り返しながら、一步一歩前に進んでいくものだと分かりました。

私も工業高校生ですので、一年生の工業技術基礎では、旋盤、溶接、鋳造、手仕上げを学び、二年生の機械実習では、マシニングセンター、ワイヤーカット、フライス盤等を使って小型卓上万力の製作実習を行っています。

この製作実習では、金属の素材から一つ一つ部品を作り上げていき、最終的には一つの製品に仕上げていきます。

そのため、製作過程においては一つの部品の完成度だけでなく、組み合わされる部品との許容差が重要であり、お互い

の部品を理解した上で、製品が出来るところが面白いと思します。

何か友人関係でも、このような融通し合うところがあるよう気がします。

これから実習では、インターナンシップ企業での経験を踏まえて、取り組んでいこうと思います。

そして将来的には、自分が製作した部品や製品がいつまでも残り、人のために役に立つ仕事をしていきたいです。

私の父は、建物の仕上げであるガラスと壁の間にシリコンを埋め込む、防水シーリングという仕事をしており、父が手掛けた建物が目に見える形で残っており、素晴らしい仕事をしていることに感動しました。

父の仕事を見学した際、高層建築ではゴンドラに乗り、埋め込む場所によって材料を変え、ガラス張りの建物では仕上げひとつで建物に写る景観が歪んでしまうので、まったく気の抜けない仕事だと感じました。その一つ一つに、父の気持ちが込められており、自分も将来手掛けた製品が、何らかの形で残っていくように努力をしていきたいです。

このインターナンシップ企業での二週間は、大変貴重なものとなりました。その中で、次の三つのことをしっかりと肝に銘じて、今後の学校生活や自分の進路に活かしていきたいと思います。

一つ目は、今、学校で学んでいる学習内容はとても大切であること。

二つ目は、プロの現場は厳しいことが当たり前で、職人さんの気持ちが製品には込められていること。

三つ目は、自分の仕事に責任をもつて、同じ仕事を同じ精度で続けること。

私は、インターンシップを通して、人生の鍵となる貴重な経験が出来たことを喜び、感謝しております。

人とのもの、学び得たもの

東京都立中野工業高等学校 総合技術科 三年

龍 原 慶

私は、生まれてから沢山のものに触れてきました。不思議なものから便利なものまで、実際に調べてみれば簡単な仕組みで、だからこそ難しかった。僕達の生活環境には人々のアイデイアによつて生み出されたものに溢れているのだ。

私はその様なものをもつと知りたい、自分でも作つてみたいと思ひ工業高校に入ることを決意しました。兄が通つていた近所の高校の方が安心して通えたかも知れないけど、何よりもを作りたいという意志が大きかつたため、工業高校以外は候補に挙げませんでした。中野工業高等学校に入学したのは、入学してから一年間は総合技術科に入ることが決まつていたからです。他の高校では入学時に機械科、電子科、化学科などを決め、その科を三年間完遂しなければならないが、その点、中野工業高等学校なら一年間機械科や化学科、食品工業科など全ての科を体験して二年進級時に選べるため後悔しないと思いました。

数学や英語、国語などは、今までとあまり変わりませんが

実習の授業は違いました。見たことも聞いたこともない機械や薬品など初めて知り得たことが沢山あり、この一つの高校という建物の中に化学の知識、機械の知識、食品の知識が詰まっていると思うと、改めて入学して良かったと実感できます。二年生に進級するとき、私は迷わず生活環境化学科を専攻しました。機械科や食品工業科も素晴らしいものがありましたが、化学はとても神秘的で何とも言えないものがありました。二年生になってからは、実習だけでなく、工業化学や化学工学、地球環境化学などの科目も増えて化学に触れる時間が一年生の頃に比べて格段に増えました。一年生の時でも初めて知ることは多かつたが、二年生になり、それがほんの一端だつたということに改めて驚かされました。実験も難しくて理解に時間がかかるが、自分の思った通りに実験が成功したときの喜びも大きかったです。

私は、授業だけでなく学校生活も頑張つてみました。入学当初は帰宅部を考えていたが、友達に誘われて生徒会に入るようになりました。生徒会の先輩方は如何にも真面目そうな人や怖そうな人などがいましたが、話してみると皆明るくて気さくな人たちでした。同じくして入つた同級生も元気な人が多かったです。最初、皆を見ていると私でもやつていけると自然に思えた。生徒会の仕事は、学校行事の準備、進行から地域のボランティア活動など様々でした。何時もふざけたりしていた先輩も仕事の時は一致団結して各々の役割をこなしていくのを見て、正直自分にも出来るか心配になりました。一年生の私達は、先輩方の補佐役に徹しているのがやつとでした。

二年生になると、多くの先輩が卒業して、僕達にも仕事が割り当てられる様になりました。先輩方の教える通りにやろうと頑張るのですが、思った通りに上手く出来ませんでした。失敗も數え切れないほどしてしまいましたが、同級生や先生方の助けがあつたため今まで何とかやって来られました。生徒会は、一人一人の地道な作業の積み重ねが大きな仕事になるのですから、私にとつては小さな会社みたいだと思いました。

三年生になると、本格的に就職活動が始まりました。私はすぐにでも働きたいと思い、進学という考えは全くありませんでした。就職者を対象とした講習会、履歴書を書く練習をしたり、面接練習もやりました。私が志望した会社は印刷会社です。三年間学んできたことをいかせる職種も考えましたが、書籍関係の仕事に興味を抱いていたので印刷会社に決めました。

これから先のことは私にも分かりませんが、どんな仕事を就いたとしても、知ることの楽しさを理解していればやつていいけると思います。

科学技術者になるための教科

東京都立科学技術高等学校 科学技術科 一年

三 池 勝

僕が入学した都立科学技術高校では、一年生全員が「科学技術と人間」という科目を学習します。最初の授業では、「科学

籤^ひと葦を使つて蟻石に穴をあけることでした。この学習の狙いは、古代人の気分を味わうことで、古代から現代までの技術の進歩を身をもつて体験するというものでした。

蟻石は柔らかい石だと言われていますが、穴をあけようと思ふと硬い石に思えます。指先に痛みを伴いながら穴をあけました。しかし、数名は痛みを伴うことなく、穴をあける装置の製作に取り組んでいました。結果的にその装置は動くもの実用性は生まれませんでしたが、あとで読んでおくように言われたテキストの中に”より早く、より楽に”、この思想が科学技術を進歩させたのだと書いてあるのを見て、僕は何をやっていたのだろうと後悔しました。装置を考えることこそが古代人の考え、即ち気分を味わうというこの学習の真の意図だったのに、力ずくで石に穴をあけるというチンパンジーでもできるようなことをしていたなんて信じられませんでした。しかし、「科学技術と人間」は答えのない科目。よく考えると力ずくで蟻石に穴を開けたこともまた正解であり、古代人の気分の一つなのだろうと思いました。古代人のなかには僕のような人間も混じっていたと考えればよいのです。科学技術の進歩に貢献しない地道な人間が。

この授業は、まさに「科学技術と人間」という科目の名に沿った内容で感動しました。古代からの知恵が、今の僕たちの生活を支えている。この考えは僕の中にありませんでした。科学は歴史なのだという新たな考え方を知った授業でした。

僕は、科学技術高校に入つて「科学技術と人間」の授業でカルチャーショックを受け、このような感動を沢山味わえるのかと期待に胸を膨らませていました。しかし、「科学技術と

「人間」の授業は思いも寄らぬ方向へと進んでいきました。

有効数字の学習。実験や実習を期待していた僕は、この授業に脱力感を覚えました。何故このような学習をするのだろうかと疑問に思いました。しかし、今ならよくこの学習の必要性が分かりります。

先日、中学生時代の友達と一緒に銭湯へ行つた時の話です。浴槽のお湯がぬるく感じたので温度を知りたくなり、温度計の近くにいた友人に温度を尋ねたところ、四十度だと友達は答えました。僕は本当にこのお湯の温度は四十度もあるのかと自分の皮膚を疑い、自分で確かめにいきました。そこで声に出しませんでしたが、頭の中でこう思つたのです。「なんだ三十九度『五分』じゃないか」と。縦書きの都合上、小数点が使えないのが残念ですが、たしかにその時、僕は最小メモリの十分の一まで読んだのです。自然にメモリの読み方が身に付いていることに気付き驚嘆しました。お湯の温度ならばどうということでもありませんが、これが実験の時の薬品の量を測る場面だつたらどうだろうと考えると、「あの授業はどうでも意味があつたのだな」と思いました。

科学技術高校の生徒は、科学技術者になるための最低限の知識を学習する時間が必要になつてくるのです。その科目こそが「科学技術と人間」なのだと分かりました。

僕は、この銭湯の体験から科目の重要性を見出しました。科学技術者になるならばまだ必要な知識や技能がある。そして、「科学技術と人間」の授業をすべて終えた時、僕は小さな科学技術者を名乗れるかもしません。

商業高校での学び

東京都立江東商業高等学校 総合ビジネス科 三年

高 橋 知 子

私が通つている高校は商業高校です。普通高校で学ぶ内容が三分の二で、残りは全て商業科目を学んでいます。商業を学ぶということは「実社会」を学ぶということです。私達、商業高校生は普通科目である一般的知識を含め、三年間を通して就職する際に必要となる知識を蓄えます。

中学三年の高校受験の時、私は中学の時と同様な延長線上で勉強をしたいとは考えていました。そのため、普通高校を希望せず、現在通つている商業高校に入学しました。商業高校生は普通科目である一般的知識を含め、三年間を通して就職する際に必要となる知識を蓄えます。

中学三年の高校受験の時、私は中学の時と同様な延長線上で勉強をしたいとは考えていました。そのため、普通高校を希望せず、現在通つている商業高校に入学しました。後悔はありませんでした。その通り、商業科目は私にとって新たなスタートを切れると感じた商業高校に入学した私に、高校を希望せず、現在通つている商業高校に入学しました。商業高校生は普通科目である一般的知識を含め、三年間を通して就職する際に必要となる知識を蓄えます。

中学では勉強した経験のない簿記やビジネス基礎など、どれも新鮮で学ぶことに希望をもてました。学んだことや自分に身に付いた知識を形にしたいと日頃から感じていたので、資格取得も魅力的でした。聞いたことのない資格を目の前にした時も、「これが専門的な知識を学べる商業高校か」と、期待は益々大きくなる一方でした。実際、初めて学ぶ商業科目は身に覚えのないことばかりでしたが、どれも社会に密着した知識で、初めて知る専門的な言葉もニュースで流れていました。これが「実社会」を学ぶということだと感じ嬉しく思いました。

新しくスタートを切つた私は簿記の虜になりました。一か

ら学んだ知識を積み重ね、二年次には会計と原価計算を学びました。現在、三年次ではこれまで学んできた知識を用いて、企業の創立から決算までの業務内容を学んでいます。取引などを実際に行うことで一連の流れを理解することが出来ます。こうした簿記の知識を形にしたいと感じ、検定試験にも挑戦しました。簿記の他にも商業科目は様々あり、商業高校生は三年間を通して多様な資格を取得します。入学当初は意味も分からなかつた言葉や、難しく不安になるような問題も、三年間の学びで必ず理解できるようになります。検定は頑張った証として、自らに自信と結果を与えてくれました。「もっと深く学びたい」「もっと知りたい」と簿記を掘り下げて学びたいと思うようになり、進路では大学進学を希望しました。三年前の高校受験時は、今まで学んだ知識を更に掘り下げて学びたいなんて少しも思つていなかつたのだから、不思議なものだと思います。それほど、私にとって簿記との出会いは衝撃でした。歴史があり、仕組みが素晴らしい特に簿記で「左と右」、「借方」「貸方」は必ず一致するという決まりに驚きました。簿記が出来ないと会社経営が成り立たないという程の簿記の重要さも誇りをもてました。進路選択の時期になり、改めてこの商業高校に入学して良かったと感じるようになりました。

しかし、商業高校に通い商業科目を学んでいることは自信をもつていいことだと感じていた分、普通科目である一般的知識の不足を自分に感じた時は不安に陥りました。それは、商業科目を勉強してきた分、三年間で普通科目においてそれなりの遅れがあることに気付いたからです。大学に入り、商

業の勉強は出来ても、普通科目の英語や歴史などは、ついていけないかもしれないと思いました。けれども、普通高校に對して、劣つている部分を感じる必要はなく、「私は普通高校の人に商業科目を教えてあげることなら出来るけど、普通科目を教えてあげることはできない」という、その違ひだけのように思うようになりました。そのように前向きに考えられたのは、商業科目の先生に「どの大学に行つても、商業科目なら教えることだつて出来るよ。」と言つてもらい、不安が自信に変わつたのだと思ひます。その他にも、商業高校で普通科目を教えてくださる先生方は、普通高校と同じ内容の授業をしてくれます。

結局は、入つた所が自分にとつて良い高校になるのだと思ひます。私は普通高校でも農業高校でも工業高校でも、どこに入学していくもそう感じていたと思ひます。きっと卒業後も、どの大学に行つても、もしくは行きたい大学に落ちたとしても、入つた所が自分にとつて良い大学になるだらうと思つています。この先、就職など進路選択はいくつも生じてくると思ひますが、自分が選択した場所が良い所だつたと感じられるよう努力を惜しまず、何事も自信をもち積極的に取り組んでいきたいと思つています。



「つくる」ことの喜び

東京都立忍岡高等学校 生活科学科 三年

土 屋 茉

も、完成した時の感動はとても大きなものでした。そしてショーンの雰囲気、観客の方の歓声や、自分の作った服を着て歩くモデルさんの輝く姿に涙がこぼれる程の幸せを感じることができました。

私の夢はヘアーメイクや着る物までトータルで提供できるような店を作ることです。

私がそうだったように、着るものだけでなくヘアーメイクや身に付けるもの、自分をつくるすべてが人生を変える大きな力をもっていると思うのです。

私の服でだれかが笑顔になってくれたらいい、気分を変えられるといい、そんな風に思うのです。外見だけではなく、中身を。外見を変えることで、気持ちが変わるような服を作れるようになりたい。この思いを夢で終わらせたくはありません。だから、これからたくさんのことを見聞きし、学んでいくよう、自分ができる努力はいくらでもしていこう、と思っています。

人の人生を変えることのできるファッショントレーナーとしていくためには搖るぎないものを持つた人間になりたい。自分を変えたい人達が安心して生きることができるような場所を作りたいのです。

今、私達の周りには、服や物が溢れていてほとんど不自由のない生活ができるでいて、けれども世界には着るものもなく苦しんでいる人がいる。食べる物すら無く、亡くなっていく人がいる。そんな中で私たちは贅沢過ぎる暮らししができていた。だからと一緒に一つの物を作り上げることは大変だけれど

大変な世界がある一方で私達の世界がある、仕方がないことを

となのかもしれない。私が服を着なくなつたところで、食べなくなつたところでその人たちが救われるわけではないでしょう。けれどもどんな贅沢をしても高い服を着ていても、大変な思いをして生きている人がいることを忘れてはいけないと

思います。

それは私達がいる「今」も目の前にあることだけで成り立つてゐるわけではなく、目に見えないところでたくさんの人がかわつてできた今なのだから、と感じました。

今、自分を支えてくれる人がたくさんいる中で、大好きな服作りができることが本当に幸せです。これから先も絶対に一人で作り上げたんだ、という勘違いはしないようにと思いました。

私は学校での生活、体験を通して、挫折や悩みとともに、喜びや自分がどれだけ服作りが好きなのかに気付くことができました。

ファッション、服とは、私にとって自分を守るためのもの、喜びを与える、自分の存在を教えてくれるものでした。「今、私はここにいる」と。



物 作 り

東京都立忍岡高等学校 生活科学科 三年

六 鎗 瞳

私は小さい頃から物を作り出す事が大好きでした。雑誌の付録やビーズ遊び、砂で作る鉄団子など自分の手を使って何かを生み出せる事がすごく嬉しかったです。だから小学校の時は図工が大好きで自分の作品を都展に出していただいた事もありました。中学校に入学してからは家庭科が大好きになりました。高校は家政科か農業科にしようと思っていました。そして、高校は生活科学科に入学して家庭科の勉強「衣食住」を一通り学びました。どの科目もとても興味をもち、楽しく学べたのですが、その中でも学んでいて楽しかった科目がファッションデザインとリビングデザインでした。なぜかというと、一から自分で考えてデザインし、それを形にするからです。物作りとは、とても簡単そうに見えますが、とても奥が深く難しいと私は思います。一つの物を作るのにたくさんのアイディアを出して、今度はそれを形として表現しなくてはいけません。何度も失敗しては作り直したり、微調整をしたり…。時には納得がいかず、全部作り直すときもあります。そうなつた時は嫌になつて全部投げ出したくなります。「何で思い通りに作れないんだろう」とか「もう作る事をやめてしまおうかな」とか。でもやっぱり負けず嫌いな私は、ここで中途半端に終わらせるのが嫌なので、またもう一度、その作品と戦います。上手く出来ない所は、私のもつている技術内で

作れる物に変えるとかして、どうにか完成までもつていこうと頑張ります。そんなこんなで、作っているうちにだんだん楽しくなってきます。そうすると、私の頭の中に横からいろんなアイデアが飛び込んできます。どのアイデアもその作品に使っていきたいと思い、どんどんアイデアを盛り込んでいくと、さらにまたアイデアが浮かんでくるので、なかなか完成しません。

私は物を作る事に終着点は無いのではないかと感じました。でも、終着点がないと、いつまでたっても作品が完成しないので、時間の許す限り、納得いくまで作り続けます。そうして、自分が納得してもうこれ以上手を加える必要がないと感じた時が、その作品の終着点であり、一つの作品として本当に出来上がった瞬間だと思います。時間をかけて丁寧に作った物の方が、ちゃんと終着点までたどり着く事が出来るし、何より出来上がった時の喜びと達成感がたまらないです。だから、私は物作りが大好きなんです。

私にとって物作りとは、大好きでやめられない事であると同時に、私自身を表現する一つの手段だと思います。私は自分自身を文章で表現する事や、人前に出て自分の意見を伝えることが苦手です。だから他者に上手く、自分自身を伝えることが出来なかつたりします。しかし、作品を作る事によつて、その作品を見てもらい私自身の表現したい事をくみ取つてもらう事が出来ます。だから、私の人生において、物作りはとても重要な役割を果たしていると思います。

大学は、プロダクトデザインとグラフィックデザインを学べる所に行って、将来は、この世に新たな物を私自身の手で

生み出せるような仕事に就きたいと思っています。そして、私の人生において、物作りがかけがえのない存在になつたらいいなと思います。これからも物作りを愛し、もつと高めていけたらいいなと思います。

ボランティアをして分かつた事、感じた事

東京都立橋高等学校 産業科 一年

滝澤 千枝里

私はこの夏、障害をもつ子ども達の施設、お年寄りの施設、介護を必要とするお年寄りのいる施設で、合わせて四日間のボランティア体験をしました。

まず、障害をもつ子ども達の施設に行きました。ここを選んだ理由は、幼稚園、小学校の時に障害をもつ子ども達が身近にいて、少し関心があつたからです。施設は初めてなので、とても緊張しました。一日のだいたいの流れは、十二時に子ども達が施設に来たら、少し話をして仲良くなつてから、遊びに入ります。三時にお祭りの場所へ一緒に行き、四時半には保護者に引き渡します。一緒にいた子に少しいやな事をされてしまった時、「痛いよ。やめてくれるかな?」と怒らずに、心から話してみました。すると目を見て、「(ご)めんなさい」と言つてくれました。担当の方がやさしく教えてください、また子ども達もこちらが言つたことをきちんと理解してくれた子が多く、一日楽しく過ごすことができました。そして「心から相手に伝えれば、分かつてくれる」ということを知りま

した。「心で伝える」のは難しいと思っていた事なのに、難しいと思い込んでいたから難しかつただけなんだという事に気付きました。

次は、お年寄りの施設でお祭りのお手伝いをしました。利用者の方々と一緒に紙のお花を作りました。その中の一人に「一緒にやりませんか?」と声を掛けたら、「目が悪いから…」と言われました。その方の悲しそうな顔を見たら、何も言えなくなってしまいました。でも、ここで引いたら話せないと思い、少し時間をおいて、「私が途中までひろげるの、仕上げをやつてくれますか?」と声を掛けたら、今度は快くやつてくださいたのでうれしかったです。その時学んだことは、「引く時は引き、押す時は押す。メリハリが大切」ということで

介護を必要とする人の施設には、二日間行かせていただきました。一日目は、とにかくついていくのに必死でした。利用者の方とお話ししたり、おしおりを巻いたり、一緒に新聞を読んだり、昔の話を聞いたりしました。介護の様子を見学させていただいたり、食事の配膳をしたりと、忙しくて疲れましたが、楽しくて、次の日が楽しみでした。二日目、ボランティア最終日。コミュニケーションをとることが、少しも足りないような気もしました。それでも、前日に話してくださらなかつた人が話しかけてくださり、うれしかつたです。二日間迷惑をかけたのに、最終日に「ここに毎日お手伝いに来てよ。楽しかったよ。またおいで。」と別れ際に、利用者のお一人に言つていただけたことがうれしく、「はい、ありがとうございます。お元気で。」と言つてている途中で泣きそ

になりました。この施設では「コミュニケーションの大切さ」を体で発見しました。

この夏のボランティア活動で、私は三つの大切な事を学びました。一つめは「心で伝える大切さ」、二つめは「メリハリをもつ大切さ」、三つめは「コミュニケーションの大切さ」です。この三つを実感することができました。何かを伝える時は心から伝えないと、真剣に話していても伝わらない時がある。メリハリがないから、だらだらとした日々が続く。コミュニケーションをとらないから、けんかしたり、話すことが楽しくなくなる。自分が子どものころから知つていて、学んで、分かっていたことなのに、大人になるにつれ、忘れかけていたような気がします。ボランティアをする事は面倒くさいなど思つていた自分を悲しく思いました。この夏に思い切つて参加していなかつたら、大切な三つのことも知らず、ボランティアは縁のないものだつたと思います。疲れたり、悩んだり迷う場面もあつたけれど、とても充実していました。また今回の施設でお手伝いの呼びかけがあつたら、ぜひ行きました。いいと思います。また、教わったことを心において、これから生活に活かしていきたいです。



働くことの喜び

東京都立橋高等学校 産業科 一年
筑木智文

私は小さいときから父が働いていた日本料理屋で手伝いをさせてもらっていたので、働いて人に喜んでもらえるのは楽しいし、私にとつては勉強よりもっと良い経験になるのではないかと思っています。それに小さいときからやつていれば、社会へ出てからも何かの役に立てると思うので良いと思います。

今、私の父は自分で新しく料理屋をやっています。料理屋は前の時と同じように日本料理屋なのですが、魚をメインに調理していて、刺身などの生ものに人気があります。父と一緒に母も夜中まで働いています。私は、今でも新しくなった父の料理屋で手伝いをしています。ある時、私の友人が「なぜ、そんなに手伝えるの?」と聞いてきたことがあります。ですが、私は手伝わされているのではなく、自分から手伝っているのです。

普通の人には、何を言つているのか分かりにくいと思いますが、私は小さいころから働くことが好きになつていたのではないかと思います。なぜ日本料理屋でなくてはいけないのかは分かりませんが、もしかすると、料理屋全体が好きなのかもしれません。なぜかというと、人にほめられることが私は好きで、さらに人と話すことも好きだということに気付いたからです。それに昔からやつていたことなので、それが普

通のことなのではないかと思えてきたからかもしれません。ですが、他の人が「なぜ、自分から手伝いをするのか」と不思議に思うのも分からなくはありません。なぜなら、私はたまたま日本料理屋をやつている家に生まれてきましたが、他の家はサラリーマンだつたり、運送会社、大工仕事などをして生活しているわけです。

また、初めての仕事がバイトの人もいれば、仕事が苦手だったり、嫌いでやらない人もいるかも知れません。私は、仕事をしているかいなかは人の自由だと思っていますが、そういう人に働くことへの喜びが大切だし、大事なことだと伝えたいと思います。

私は生きることと働くことの意味は同じなのではないかと感じます。たしかに働いていると、すごく嫌になつて苦しくなるときもあります。だからこそ私は、楽しいことをその働いている中で見つけようと思っています。そうすれば前向きな答えがきっと出てくると思います。この考えは私が働いているときに思つたことです。だから、働くことを苦しいとうしても感じてしまう人は、その人の人生も苦しい部分が多いのではないかと思います。

だから私は、働くことの喜びを知る人が増加してくれればいいと思います。なぜなら、働くことの喜びを知る人の人生は、これから多くの楽しみを見つけることができると思うからです。私も本当のことを言うと、少し苦しいなど感じるところもありますが、前向きな人生を送るために、働くことの喜びをもつと本気で見つけていきたいなと思いました。

また、もう一つ、働かない人と人とのコミュニケーション

ン力が低下するということです。今の社会では人と人とのコミュニケーションが重要とされています。それは将来どんな仕事についても必ず必要になるもので、私は学校や手伝いがその練習だと思っています。なので、今、働いていない人は今からでも、コミュニケーションを深めるという意味でも、働いてもらいたいなと思います。

私の働くことの喜びは、日本料理屋で言えば、自分の作った料理で人を喜ばせることや、人との会話を通して人の温かみを知ることができるということです。私はこの働くことへの喜びをさらに知り、深めていきたいと思います。

インターんシツプから学んだこと

東京都立橘高等学校 産業科 二年

渡 邊 雄 次

○○ゴム株式会社に三日間お世話になりました。三人で体験しに行って、三人ともそれ違う仕事を任せられました。

初日は、洗い場という、従業員の方々が一番暑くて大変という所を手伝いました。洗い場は仕上げ作業を行う所で、そこでは焼いたゴムを熱い塩酸で洗った後に、水で流し、さらには熱湯で洗います。なぜ洗うのかというと、ゴム同士の付着を防ぐために付けるカルシウム粉末を落とすことと、ゴムを焼いた時に付いた汚れを落とすためにやります。その後、隙間ができるないように手で丸く巻き、四ヶ所をテープで固定してから、ラップで全てを巻く作業をして、仕上げ作業は終わ

ります。しかし発注の関係で、焼いたゴムの数量がとても少なかつたので、最初の方はやる事ありませんでした。仕上げ作業は、とても重要な作業ですが、その作業をやらせて頂きました。やり始めはとても難しく挫折しそうになりましたが、根気強くやり続けたら、その担当者の方に筋が良いと言われたので嬉しかったです。

昼休みに入り、お弁当を食べました。ご飯を大盛りにして頂いたので、お腹がいっぱいになり、動けなくなりましたが、また仕事開始です。今度は前に作ってあつたゴムの汚れ落としです。トロールを布に付け拭き取りました。それを五時まで続けて終わりました。最後にお風呂に入つて、汚れた体を洗い流して初日の仕事は終わりました。

二日目に入つてまた違う作業をやらせて頂きました。押し成形機の中にゴムを一杯にして、それから押し出し成形機の先端に金型を付けて、素材を投入して箱に巻き入れました。その時、ゴム同士が付着しないようにカルシウム粉末をかけます。そのために全身が真っ白になってしまいます。この細かな作業一つで、失敗すると商品にならなくなってしまう重要な作業です。ここで、巻き取った箱を八個重ねて加硫釜に「たぐり」という作業です。焼いたゴムチューブを直径約四十センチくらいの円形になるように手で巻きます。その後に一ヶ所ビニールで巻いて固定して洗い場に持つていけるようにして終わりです。この作業を終えた後の箱にはカルシウム粉末が沢山入つてるので、それをきれいに落として箱が置

いである場所に重ねます。このような作業を延々と続けて二日目は終わりました。

三日目になつて違う作業かと思つていたら、二日目とほとんど一緒でした。押し出し成形機の掃除から始めました。ただひたすら掃除したり、ゴムの素材を一枚入れ、押し出し成形機の中を掃除しました。二日目に比べると、とても楽でした。

二日目の午後に新聞記者の方が来て、インタビューを受けました。突然の事で驚き、神経を集中する作業をやりながらインタビューを受けたので、あまりよい返答ができませんでした。でも記事はとてもよく書かれていて、しかも僕の写真が出ていたので恥ずかしくもあり、嬉しくもありという感じでした。三日目の午後には担任の先生が来て、作業をずっと見られていて、親が見ているようでとても恥ずかしかったです。

仕事が終わつてからのお風呂がとても気持ちよく、さっぱりしました。最後に、製造部長さんから感想を聞かれました。また社長さんからも色々な言葉を頂きました。

はじめは、今回の体験は面倒だなと思つていましたが、力を抜いてもいいような作業でも、精一杯やり遂げなければ、良い商品が出来上がらないという事を身をもつて体験させて頂きました。



私の可能性

東京都立若葉総合高等学校 総合学科 二年

伊藤未紅

私の夢は声優でした。志した理由は凄く単純で、昔から憧れていた事に加え、友人から勧められたから、ということもありました。当時は現実も見ることなく、ただ「なりたい」という感情だけで動いていました。その勢いのまま、オーディションに応募したりもしました。何も考えずに取った行動だったので親とも衝突しました。親も受かる事はないと思っていましたのでしよう。一次選考が通つた時、動搖のためか、物凄い勢いで怒鳴られたのを覚えてています。

何日か膠着状態が続き、お互いに怒りが収まりつつあつた頃、私は改めて声優という職業と向き合つてみようと思い、客観的に声優について調べ始めました。受験生であるにもかかわらず、一ヶ月もの間、毎日パソコンにかじり付くようにして過ごしていました。その結果、二ヶ月で受験に必要な知識を詰め込むこととなつてしましました。ですが、後悔はしません。その一ヶ月があつたお陰で、受験の前に気持ちの整理がつきました。

無事高校生になり視野が広がると、冷静に物事を考えるようになりました。改めて考えてみれば、声優になるためには養成校に通わなければならぬ。もし卒業しても確実に声優になれるとは限らないので、どう転ぶかは自分次第。その上、私の保護者は定年を迎え、これ以上負担を掛けたくないとい

うのも諦める理由となりました。

現在は、声優の他に目指していたもう一つの夢に向かって邁進中です。もう一つの夢とは物書きです。声優を諦めて幾分も経たないうちに切り換えたので、乗り換えたと言つた方が正しいのかもしません。元々文章を書くことが好きだったし、志す以前から当たり前のようにやつてきていた事なので、すぐに切り換えることが出来ました。

志してすぐにやつたことは、インターネット上の投稿でした。手軽に様々な人に読んで貰うことが出来るからです。

実際、手応えはありました。とあるコミュニティースペースに投稿したところ、沢山の感想をいただきました。その中でも特に印象に残ったコメントが『久しぶりに泣きました。』の一言でした。飾りも何もない真っすぐな言葉に心が温まり、今の私を動かす源となっています。ネット上では、たったの一言でも心を傷つけることもありますが、逆に人の心を温かくしたり、元気をくれたりもします。全く知らない人に読んでもらうことで、より客観的な評価を聞くことが出来、作品の質を高めようと努力する事を覚えました。時折文法ミスも注意してくれたりするので、その場合は教科書から調べたりもしました。

しばらくインターネット上で自信をつけた後、とある出版社に小説を投稿することを決意しました。結果から言えばと一步でした。経営企画部の方からメールで返信が来て、詳しい講評が書簡で届きました。その後、何度かその経営企画部の方と電話のやり取りをして、自費出版としてなら本が出せるという所まで上り詰めました。ただ、その半額負担とし

ても決して少くない金額に、またしてもそれは諦める結果となりました。けれど、毎日何千何百と届く文章の中で、私の作品が出版社の目に止まつたという事実は、私の中で大きな自信となりました。

今まで様々な事にぶつかり、碎けて、私は夢に向かう上での厳しさを学びました。思うように行かなくて、かんしゃくを起こしたりもしました。しかし、私はまだ若いのだから壁にぶつかるのは当然で、全てが上手く行くことなんて大人の世界でも難しいことです。自分から挑戦することで、沢山のものが見えるようになりました。今までやつてきたことを教訓、支えにして、もつともつと自分の世界を豊かにしていくたいです。道は決して一つではない、最初は一つでもいずれは数え切れないくらいの可能性が見えるかもしれない。今までの私だと、また新しくやりたいことが出来るかもしれません。けれど、決してやりたいことは我慢せず、後悔しないように片端から体験してみればいいのです。卒業までの残りの一年半は自分の可能性を信じ、磨いて行こうと思います。最後に、私は充実している今の私が大好きです。大人になつてからも、胸を張つて自分が大好きだと言える大人になりたいと思つています。



夢

愛国高等学校 衛生看護科 三年

齊 藤 夕 貴

小さい頃から憧れていた看護師。その夢を早く叶えたかったため、愛国高等学校衛生看護科へ入学した。

看護科に入学する前に思っていた看護に対する考え方と、実際に勉強をしてからの考え方は全く別物だ。入学する前は、点滴をしたり医師の手伝いをしたり、「看護師さんってかっこいい」というような軽い気持ちだった。だから勉強も楽しみでたまらなかつた。

そんな思いでいざ勉強をすると、想像以上に難しく、看護師になるためには、たくさんの知識と技術を身に付けなければならぬのだと実感した。人体のしくみや健康な体を維持するための数値、病気の成り立ち等を正確に覚えておかなければならぬ。また、実技の演習では血圧測定や点滴をするだけでなく、体を拭く清拭^{せいしき}、足を洗つて温める足浴、髪を洗う洗髪など、看護師が行うとは思つてもいなかつた内容もあり、驚いたこともある。

二年生の三学期、何もかもが初めてで、不安と緊張を抱えながら臨んだ基礎看護実習。受け持ち患者様とのコミュニケーションやその人にあつた援助、つまり個別性というもの、他にも様々なことを学んだ。コミュニケーションは、看護の中で最も基本的なものである。患者様が安心して入院生活を送れるような優しい声かけ。治療に対する不安や訴えを、何で

も話せていただけるような明るい雰囲気作り。患者様と接するにあたつてこれは本当に大切なこと。これでこそ信頼関係というものが生まれるのだと思う。私はどんな患者様でも明るく接し、何を言われても嫌な顔せず対応して、信頼される看護師を目指そうと決めた。

三年生での各論実習は、約半年間に渡る長期実習。もうその半分を終えたところだ。基礎実習とは違い、求められることが多い。何をするにも根拠が必要。ただ何かを行うだけではなく、それを行うことによりどういう効果があったのか、と評価も行わなければならない。毎日がとても辛くて、逃げ出したい時もあつた。そんな中、支えてくれたのは友達。同じ夢を目指す仲間。実習の行き帰りや休憩時間に話をすると、不思議なことに辛さは一瞬にして消えてしまう。家に帰れば、夢を応援してくれている家族がいる。その期待に応えるためにも、どんなに辛いことでも頑張ろうと思う。

前半の各論実習では、たくさんのこと学んだ。まず一つは、寝たきりの方の看護についてだ。寝たきりになつてしまつた患者様は、自力で動くことができない。つまりお風呂も入れなければトイレにも行けない。そのためオムツを使用したり、看護者が清拭を行つたりする。誰かが介助すれば、寝たきりの人も日常生活を送れる。しかし、その今までいいわけがない。少しずつでもいいから入院前の生活に戻すことが必要だ。そのため看護師は何をするのか。まず患者様の情報を知る。次にその方の問題点を挙げ、それを改善するために評価をする。例えば、排泄について。今はオムツを使用して

いるが、ポータブルトイレでの排泄を促し、のちのちトイレで排泄できるように援助する。そのため、トイレに行きたくなつたら教えてください、などと声かけをする。しかし自分の思い通りにはいかない。患者様によつてはオムツのままでいい、という人もいれば、看護師さんに迷惑をかけてしまうから、と遠慮がちな方もいる。そういう患者様にはどう対応するか、ということも看護技術なのだと学んだ。このように自分が考えた計画が実施できなかつたり、実施しても意味がなかつたりすることがあつた。この時、改めて看護とは難しいものだと思つた。

もう一つは、グループメンバーの必要さ、大切さについてだ。回復期・療養型病棟で若い患者様を受け持たせていただいた時、今まで苦労したことがなかつたコミュニケーションについて悩んだ。その方は少し閑わりにくい方で、何を話したらいいのか分からなかつた。そのため患者様のところへ行くのを避けていたり、受け持ちを変えたいと思つたりする時があつた。しかし、このことを議題にしてカンファレンスを行い、グループメンバーと意見交換を行つた。この話し合いで、自分だけでは気付けなかつたことがたくさんあつた。受け持ちを変えたいなんて弱音を吐かず、最後まで頑張ろうと思つたのはそれからだ。こんなことで受け持ちを変えるなんて情けないし悔しい。今は辛いけど、この辛さを乗り越えた時の達成感がどれほどのものか、味わつてみたいと思つた。

だから、受け持ちを変えないで、最後まで同じ患者様に援助をしてきた。これは、きっとグループメンバーがいなければ乗り越えられなかつたことだつた。本当にありがたく思つて

いる。

長いようであつという間に前半の実習が終わつた。日々の実習が充実した一日を送れたのだと想う。私は、この各論実習が終わった時に何か変わつていて、絶対成長したいと思つている。まだ全ては終わつてないが、前半の約二ヶ月間の実習で私は何か変わつただろうか。実習に対するけじめが中途半端だつたり、まだ甘えていたりするところがあると思う。

一学期の成績が返つてきた。予想通りに下がつてゐる。一般教科との両立ができるていない。二学期からは、実習はもちらんのこと、一般教科の勉強も頑張らうと思う。

すべては看護師になるため。今がどんなに辛くとも、乗り越えたらきっと何か大きいものが得られる気がする。今私はどういうところで働きたいか、という目標もある。それは、救命救急だ。一分一秒も無駄にできない、一命をとりとめるところだ。毎日が忙しいし、高度な技術と知識が必要な仕事だと思う。

看護実習

愛國高等学校 衛生看護科 三年

榮 慊 那

五月十三日から成人老人看護実習が始まりました。今回の実習は基礎とは違い、患者様の疾患を理解し、アセスメントをするところまで行う実習のためとても不安でした。

私は、○○病院で実習をさせて頂くことになり、グループ

のメンバーは全員桜組で話しやすく良かつたと思いました。

二クール目に、私は初めて内科で実習させて頂きました。

内科では、寝つきりの患者様が多く、介助が必要である患者様が殆どでした。私が受け持たせて頂く患者様は、九十歳代の女性の方でした。耳はよく聞こえ、理解がよく出来る方なので、とても話しやすく、自分が住んでいたところや千葉について話してくれました。

患者様には、たくさんのが既往歴がありました。そこから今起きている症状と関係があるのかと考えても自分では分からず、全体像が描けずにいました。患者様の問題点は浮腫と背部痛だと思いました。浮腫を軽減するためには足浴を行ったり、足を挙上させたりしました。背部痛は、体位変換を三十分または一時間に一度のペースで行いました。私は何故背部痛があるのか分からずについて指導者さんに「何故、患者様は背部痛があるのか分かる?」と聞かれました。私は「長時間ベッドに寝ていてるからです。」と答えると「違うよね。よくカルテ見てみなさい。」と言われました。そして、カルテを見てみると、前に骨粗鬆症の既往歴があり薬を内服していたが、内服を止めたため痛みを訴えているのだと分かりました。

金曜日には特浴を行いました。患者様のバイタルサインを測定し、異常が無いことを確認してから特浴へ行きました。患者様の着脱が上手く出来ると、洗うことだけに気を取られずに観察をしないといけない、という気持ちで一杯になりました。患者様はストレッチャーの上で背部痛を訴えていたため体位交換を行つたりもしました。患者様は、特浴を終えると少し疲れた様子で眠ってしまいました。そし

て、私は「ボー」と患者様を見ていました。よく考えたら、それは時間の無駄であり、その間にカルテを見直したり、薬を調べたりすれば良かつたと思いました。

二週目に入り、病棟へ行きカルテを見ると、患者様に急変があり黄疸症状が起きていました。私は黄疸について全く頭に入つていなかつたため、何故黄疸症状が出現したのか分からず、家へ帰つてから勉強をすることになったのですが、記録がなかなか終わらず黄疸を調べるのが少ししか出来ませんでした。そのため、今の患者様に必要なケアは何か、というところまでしか知ることが出来ませんでした。私は「患者様を受け持たせて頂いているのにとても悪いことをした」と思いました。患者様のおむつ交換を行つた時に便が白色だったのを見ました。指導者さんに「何故、こんな色の便が出たのか分かる?」と聞かれましたが、分からず家で調べてくることになりました。この日は、前の日の失敗を繰り返さないようにしていました。この日は、前日よりもは少しだけ早く終えることが出来ました。すると、いつもよりは少しだけ早く終えることが出来ました。努力をしたら努力した分だけが、自分に返つてくるとよく言われますが、本当にそうなのだと想到了。患者様は、ビリルビン値が高かつたため黄疸症状が出現し、便の色が白色になつたのは、ビリルビンが上手く腎臓に運ばれなかつたために起きた症状だということが分かりました。いろいろなことが分かつてくると、何だか少し樂しくなってきた自分がいました。

いつも昼食の時間は、患者様とロビーへ行き食事見学をしました。車椅子へ患者様を移動させるのがとても苦手な私に、

ある看護師さんが「患者様を立たせる時は、少し前に引いて立たせてあげた方が楽だよ。自分が立つ時も真っ直ぐだと立てないじゃない。それと同じだよ。」とアドバイスをしてくれました。私はそのアドバイスを頂いてから、そのことに気を付け、患者様の足をフットレスで傷つけないように移動させられるようになりました。患者様の黄疸が引いてくると、便の色も普通に戻り、皮膚の色も眼球の色も戻ったので嬉しく思いました。

私が患者様に行っているケアは、足浴・手浴・全身清拭・寝衣交換でした。足浴を行うと、患者様は「とても気持ちいい」と言つてくれました。そしていつも「お世話ばかりお掛けして」と申し訳なさそうに言つているので、その言葉に対してどのような言葉を返したら良いのか分からず、「いえ、気持ちいいと言つてもらえてとても嬉しいです。」とだけしか言つてあげることが出来なかつたので、自分で酷いなと思いました。全身清拭を行つている時にも同じことを患者様に言われ「気にしないでください」と言いました。それを患者様はどうのようにとらえたのか分かりませんが、改めてコミュニケーションの難しさを実感しました。

患者様は、自分でやりたいけど出来ないという辛さや、誰かにいろいろ身の回りのことをやつてもらい「ありがとうございます」という気持ちと「申し訳ない」という気持ちでいっぱいであるため、自分で出来ることは、自分でやりたいのだということが分かりました。

ケアを行う時はグループ内で物品を上手に回し、午前中に清拭や足浴を終えられるようにしていましたが、なかなか物

品の回しが上手にいかず、午後に清拭が回ってしまったことがありました。物品を待つてしているのではなく、病棟内にある物品を上手く利用することと積極的に先生や指導者の方に報告することが、私には足りなかつたことを学びました。

二学期からの実習では、このようなことに気を付けて実習を充実させられるように頑張りたいと思います。

病院実習を行つて

愛国高等学校 衛生看護科 三年

鈴木さや華

私が「看護」を学びはじめて、今年で三年目になります。この三年間に高校生で学ぶべき一般教科と両立しながら、看護について専門的に沢山のこと学んできました。中学生の時に「看護師」に憧れ、絶対に辛いことがあつても将来看護師になるんだ、と何があつても決して諦めないとということを決意して、衛生看護科への進学を決めました。

初めて「看護」というものを専門的に詳しく学び、予想以上に難しいと感じたことを覚えていました。今思えば一年生の頃は、授業も私が付いていくるスピードで内容も基礎中の基礎という感じだったので、テストでも良い結果を出すことが出来ました。しかし徐々に、授業も難しくなり、勉強量も増え、テストでは満足した結果をほとんど残すことが出来なくなつてきました。

しかし、試練はこの勉強だけではありませんでした。高校

二年生での戴帽式も無事に終えることができ、ついに病院実習が始まりました。病院実習については、先輩や先生から様々な話を聞き、私なりに覚悟をしていました。しかし、病院実習初日の前夜は、本当に緊張や不安だらけで眠れなかつたことを思い出します。初めてナース服で病棟に実習生として行き、頭の中が真っ白になるとは、このことかと実感するほどでした。

今現在の実習から考へると、基礎実習は私にとってとても辛く、大変という気持ちで行つていきましたが、今の方が比べ物にならない程、過酷だということを実感しています。

病院実習では、私達実習生一人一人が患者様を受け持たせて頂いています。今まで教科書で勉強して学んだり、生徒同士でケアの練習をしたりしていましたが、相手が本当に入院されている患者様であり、私達の一つ一つの行動や言動に責任をもつことなど、最初は何をするのにも緊張で、患者様とお話ししていく中、自分が何を言つているのか分からなくなってしまうこともありました。

患者様の状況は日々、変化するものであり、今からこの先、起これりうる可能性のあるもの、様々な事態に備え、私達は勉強して知識を得なくてはなりません。毎日、少しずつ勉強し、また患者様の受ける検査の内容や方法、手術についても勉強しました。更に毎日、記録を書きますが、私はこの記録が一番辛く、苦手でもあります。先生や先輩、病院の指導者の方に書き方を教えて頂くこともありますが、今も満足したものを受けたことはありません。

一日実習で疲れてしまい、家に帰つてもやらずに寝てしま

うことも多く、実習中は一日の生活バランスが崩れ、睡眠不足になることもあります。また、患者様の個別性に合つた看護を求められます。それでも分からず、先生に助言を頂くこともあります。正解を見つけ出すことができないので、記録や勉強以外にも自分の知識や頭を働かせなくてはなりません。今は実習生の身であり「分からるのは当然」「これから沢山の知識を身に付けて、今細かく記録を書いたり、辛いけど、ここにいる看護師全員が経験していること、将来の為に大切なことだから」と指導者の方から励まして頂くこともあります。

しかし、実習が思い通りに進まず、求められていることが導き出せなかつたりすると、自分は将来看護師になれるのか、なれたとしても失敗ばかりしているのではないかなど、将来に対しての不安が表れ始めました。

また不安だけでなく、後悔することもあり、正直この三年間、何度も看護という道を辞めたい、もう少し楽な道があつたのではないかと、この先、看護を学ぶことをためらつてしまふ自分もいました。その気持ちは、電車での通学中に最も強く感じました。周りの一般の高校生達を目にすると、私達程辛いことは無いのではないか、私も普通の高校生になりたい、と日々不満に思つてしまひます。

しかしそんな時、とても私の心の支えになるものがあります。それは同じ看護科の友達です。友達と不満を言い合つたり、一緒に勉強していく中で本当に励みになります。同じ夢に向つて共にお互い同じ悩みや試練を乗り越えてきた友達だからこそ、本当に友達の存在は大切でとても大きなものだと感じま

した。そして高校から看護の勉強をし、更に一般教科まで学ばなくはいけないので大変ですが、友達と同じ困難を乗り越え、何でも相談でき、皆で励まし合いながら勉強できるのは、看護科だけの魅力ではないかと思います。

病院実習は、予想を越えるとても大変なものです。本物の看護師の方の活躍を目の前で見ることができ、同じ病棟で実習させて頂いていることにとても誇りを感じます。辛いことばかりではなく一緒に実習させて頂くことで、私もこの看護師の方のようになりたいと決意をし、良い刺激を受ける貴重な場だと思います。また患者様にもいつも励まして頂き、朝病院に行くのが辛くとも、いざ病棟へ行つてしまえば弱音を言つてられないし、患者様にお会いすると、自然に笑顔になつてている自分がいます。患者様の前では、辛い顔なんて見せてはいけないという気持ちもあると思いますが、患者様に少しでも安心した入院生活を送つて頂くため、自分には今、何が必要なのかと考え、一日が始まれば、休む事なくケアや検査の付き添いに行かせて頂いています。患者様がいるからこそ、私達は勉強できるのであって、実習生というまだまだ未熟な私達を受け入れてくださっていることに、本当に感謝の気持ちでいっぱいになります。また、看護師不足という問題がある日本ですが、普通業務だけでも大変な看護師の方々に、私達の指導をして頂いていることにも感謝しています。

これから更に、辛く大変な困難が絶対に待ち受けていると思いますが、自分が将来、看護師として活躍している姿を夢見ながら、今後も励んでいきたいと思います。

高校生活と進路

岩倉高等学校 機械科 三年

鈴木祐介

私は現在、東京の岩倉高校に通っています。最高学年となつた今、今後の人生を決定する重要な岐路に立っています。私には幼い頃から描いていた夢があります。それは、電車の運転士になることです。小さい時に自然と興味が湧き、家族で出掛けた時などはよく駅まで足を運んで電車を眺めていました。そして「絶対に電車の運転士になる!」と言つていたのを今でも覚えています。

私がこの高校を知ったきっかけは、△△社から発行されている「鉄道マンになるには」という本を読んだからです。この本の内容を簡単に説明すると、実際に現場で活躍される運転士や車掌、駅長さんの生の声で書かれています。その中に紹介されていたのが岩倉高校でした。全国に二校しかない鐵道学校で一番歴史が古いということと、「鉄道実習」という言葉に興味がひかれました。普通高校では体験できないことなので、絶対に入りたいと思うようになりました。両親に話すと最初は難色を示していましたが、承諾してもらいました。

機械科・運輸科のどちらにするか悩みましたが、當時、機械を扱うのが好きだったので機械科に進みました。もう一つの決め手として、他の科より圧倒的に資格取得数が多いといふことでした。

一年次の授業は最先端のマシンやパソコンを使用し、旋盤加工やCADの操作方法を学びました。機械科の先生方はいつも明るく、冗談も通じる面白い先生ばかりです。また、資格取得に強い先生ばかり揃っているので安心できました。こうした環境もあり、毎日の学校生活が楽しく感じられるようになりました。一般教科は、中学校で学んだことを土台にした授業で多少難しく感じられました。

二年次になると、機械科の中で鉄道コースと自動車コースに分かれます。私が選択した鉄道コースでは、大手の鉄道会社で使用されている教材を使い、電車の仕組みや構造を学びます。運転法規という科目では、鉄道マンに一番重要な「運転取扱に関する法令および会社内規程」や「運転のしくみ」の基礎知識を学んでいきます。機械科にしか無い授業といえば製図です。一番辛い科目で、忍耐力と持久力がなければ無理です。ここで待望の運転実習の授業が加わります。実際に使用されている物と同型のものを使用し、安全・正確に運転できるかを学びます。文化祭時には一般開放され、一番の目玉となっています。

そして、この学校最大の売りとなっている鉄道実習があります。これは、大手の鉄道会社の駅で業務の体験をします。私が千葉駅で体験を行つた際、お客様のご案内に苦戦したことを見ています。外国の方が多く、英語が苦手な私にとって大変苦労しましたが、「ありがとう」の言葉をかけてくださると、やりがいと喜びを感じることができました。

三年次になると、より高度な専門知識を学ぶようになります。そして、就職の準備が本格化します。ここでは、機械科

独自の科目として電気基礎と機械設計が加わります。機械設計はパソコンを使用して設計図を描いたり、一台何百万もする全自动ロボットの制御プログラムを作成したりしました。電気基礎は主に計算中心で、数学が苦手な自分には向いていませんでした。その他に、家庭科や地理も加わって楽しい授業になります。

岩倉高校で三年間過ごし、一番の思い出となつたのは鉄道実習です。ここでは、お客様目線で仕事をする事の重要性や正確にご案内できるかを学びました。

私は今、地元にあるコンビニエンスストアで働いています。この仕事で一番重要なのはお客様と明るく接し、コミュニケーションを取ること。そう、鉄道実習で学んだことと一緒にです。お客様に明るく対応しなければ無愛想と思われてしまい、二度と同じコンビニエンスストアを利用したいと思われなくなります。駅員も同じで、明るく接客しなければ二度と同じ人に頼りたくないと思われて、会社のイメージダウンに繋がってしまいます。コンビニエンスストアでは道を尋ねられる方が多く、コミュニケーション能力が必須になります。鉄道でもコミュニケーションが取れなければ上手く伝わらず、相手を不快な気持ちにさせてしまえばかりか、予定の列車を乗り過ごすという事態も起こりかねません。私が鉄道会社に就職したら、鉄道実習やコンビニ業務で得た経験をうまく活用し、精一杯頑張りながら夢である運転士になればいいなと思っています。

私の職業観

国際理容美容専門学校 美容高等科 一年

庄 司 有 佐

私が美容師に対する職業観で一番大きいのは、清潔な仕事だということです。

いつも美容室に髪を切りに行くと、部屋の隅々までとてもきれいに掃除が行き届いていて、汚れている部分が見当りません。道具の出し入れなどもとてもスムーズに行われており、そういう目に見えない所にも気を遣っているのをよく見ます。

美容室は窓ガラスも大きく中もよく見えますが、一度たりともきれいな状態を崩している所を見たことがありません。なぜだろうと思い、髪を切ってもらっている最中に様子を見てみると、仕事をしてない人がいないことに気が付きました。

全員がなにかしら動いているのです。洗濯している人、床をはいている人、他の人のサポートをしている人等、ムダがないです。それ以上に驚いたことは、それを誰の指示を受けることなく自分で率先して動いていることで、優先順位がしつかりと頭の中に入っているんだなと思います。そうでなければ自分が次にすれば良いことは判断できないと考えます。こうした一人一人の努力があつて清潔なイメージが保たれています。

それと清潔感以外にも、お店の雰囲気などにも気を遣つていると思います。私が住んでいる近所にはたくさんの美容室がありますが、まず同じような店は一つもありません。それ

ぞれ外観や中の構造、道具等がそのお店によって違い、個性がとても強いものばかりです。窓を大きくつくり、中の構造をシンプルに統一してスタイリッシュに見せたり、外観から特徴を出して洋館風に見えるもの、レストランに見えるようなもの、ログハウスのようなもの、どれも思わず入つてみたくなるようなお店ばかりです。使っている道具も外観に合わせてものを選んでいて、まるで別世界のような感じです。今までで一番魅力的に感じたのは、外ガラスに水が通つていてその中を水泡が文字をつくっているものです。よくこんなものを考えたなと思いました。それだけではなく、そこで働く美容師さんの服装も全て統一されているように見えます。

この他にも、当たり前すぎて気付きづらいのが美容師さんの動作や姿勢などです。よく注意して見ていると、滅多に猫背の人や動作が良くない人はいない気がします。いつ、どんな時も、ぴしっとした姿勢でテキパキ働いています。でも、もし、この当たり前が崩れたら、と思うと思わずゾッとしてしまいます。いくらお店の外観や構造や清潔に保つことに努力しても、そこで働く人がとても動きが鈍かつたら、みんな猫背だつたら…。ある意味では恐怖さえ感じます。まずそのお店に入りたいとは思わないでしょう。良いお店づくりには働く人の質も重要だと思います。さつきは姿勢についてしか書きませんでしたが、表情などもともにこやかで話しやすい雰囲気です。美容室に入るときは、なぜか緊張をしてしまいますが、美容師さんの話や表情でほぐされることもあります。きっと、こうした接客態度にも気を遣つてているのだと思います。

美容師は、どこにいてもどんな所でも常に気を遣わなければならぬ職業だと思います。汚れた所があればすぐに掃除をしたり、他の人が助けを必要としていたらすぐにヘルプに行ったり、お客様にリラックスしてもらうために笑顔で接客をしたり、常に自分の身なりや姿勢に気を付けたり…。こう考えると接客業の中で一番気苦労が絶えない職業なのではないかと思います。技術を習得して資格を取るまでもとても大変だけど、美容師として働き始めてからの方が大変だと感じます。けれどもそのつらい仕事をこなしているからこそ、あんなにかつてよく見え、輝いているのでしょうか。その姿を見て美容師になりたいと思う人はたくさんいると思います。かくゆう私もその一人です。

私から見た美容師の職業観は、いつもどこでも気を配り、かつそれを周りに悟らせない強い精神をもち、常に時代の最先端をいく職業だと思います。

障害者と健常者をつなぐかけ橋として

村田女子高等学校 商業科 三年

河 原 恵里子

私は商業高校に進学し、三年間勉強をしました。私の通っている学校では、主に簿記や情報処理、商品と流通などの科目を学びます。私はこの三年間で、今まで全くといっていい程知らなかつた事を学び、普段何気なく行つてゐる買い物などを新しい目線で見られるようになり、手ごたえを感じるこ

とができました。

また、私は中学生の頃から、知人の運営する障害者と健常者の勉強スペースを目的としたNPO法人の手伝いをしていました。ある時、ふとした事から、「出来た商品が私達に届くまで」という題で、私が話をするという機会がありました。

教室に来ていた障害者の方やその保護者の方々も、初めは聞きなれない単語や説明に首を傾げていました。しかし自分達の生活に密接に関係していると分かると、興味をもつて話を聞いてくださいました。この時私は、三年間自分が学んで積み重ねてきたものとは、また違った手ごたえを感じました。私の習った内容が、障害者の方にとつて新鮮で役に立てたのだと分かり、嬉しく思いました。

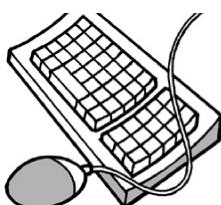
また別の機会に、教室の近くにあるパソコン教室で、簡単なインターネット活用法や文書作成ソフトを使った書類作成などを教える事もできました。

インターネットが情報通信の手段として欠かせないものになつてゐる現代です。障害者の方にとつてもそれは便利なものですが、一歩間違えれば大変危険なもの、と認識されているのであまり馴染みがありません。そのため、インターネットの便利性、無防備な認識の危険性や安易にクリックしてはいけない理由などは健常者の私にとつても、たいへん役立つものでした。この体験を通して、私は健常者だけではなく、障害者の方々との繋りを以前よりもより強くもてた事を嬉しく思いました。

私は家族の中に障害者が二人います。そのため、そのような繋がりで教室の手伝いもさせて頂けるようになり、また障害者学級や障害者達の劇団などとの繋がりもあります。他の人に比べ、障害者を狙った犯罪にはとても敏感で、許せないと目頃から思っていました。私が操作などを教えることによつて、少しでもネット詐欺やクリック犯罪などの危険を防げるようになれば良いと思いました。

パソコンという道具は、犯罪と隣り合わせで、間違えてクリックしてしまうと、不当な金額を請求される事件に発展してしまい、事件も多発しています。危険なものだという印象も未だ拭えません。しかし現代の社会は、もはやパソコンなしには語れないほど、生活にも経済的にも深く浸透しています。もし事件などに巻き込まれたら危険だからという理由で、障害者の方々が自由にパソコンを扱えなくなってしまいます。そのようなことが起こらないように、私がパソコンの便利さや、正しい使い方をこの小さな教室から伝えられたらいなと思います。

私は来年三月で高校を卒業しますが、今まで培ってきたスキルなどを活かしていきたいと思っています。そして大学・就職を目指し、これからも障害者・健常者の垣根がない、より良い人間関係をつくっていきたいと思います。



女性としての社会進出

村田女子高等学校 商業科 三年

佐藤真菜美

私は現在、女子高校に通っています。中学校までずっと共学だったので、最初は女子校に進学する気は全くありませんでした。そんな中、中学の先生に勧められたことをきっかけに、在学している高校を見学しました。高校の先輩方は、流行に流されることなくきちんと制服を身に付け、緊張している私に明るく挨拶してくださいました。素晴らしい高校の雰囲気に驚き、強く憧れた私は、すぐに入学を決意しました。

入学して三年目になりますが、校長先生をはじめ、多くの先生や先輩方から女性としてのマナーを学んできました。服装と挨拶はもちろん、目上の人への接し方や、女性として社会に出るとということなど、すべて私達にとつて重要な事です。これらは基本的で当然の事かもしれません。しかし、外部のお客様から「挨拶がきちんとできていって素晴らしいですね。」と、よくお褒めの言葉を頂くたびに、改めて重要性を実感しています。このような基礎を高校在学中に学び、身に付けることができて本当に良かったと感じています。そして、これらの基礎は、私達女性の場合は特に必要であるとも思います。沢山の人が働く中で、女性も様々な職業で活躍しています。一つの企業で働く以上、企業の利益に貢献し、責任をもつて行動することは、男女を問わず求められています。しかし、仕事をする上で女性社員の方が適している仕事もあり、企業

が女性社員に求めるものは高くなっていると思います。女性の職業には、銀行窓口やスチュワーデスなどの接客業が多くあります。このような接客業には、正しい日本語をはじめ、清楚な服装や明るく分かりやすい対応が求められます。また、お客様への気配りなども重要なポイントになります。特にこれらは女性のもつ力を発揮できる点であると同時に、期待されている事だと思います。女性ならではの工夫を活かせることは、とても素敵な事だと思います。

将来、社会に出て活躍するためにも、この三年間で本当に必要なことを実感し、学べることができて本当に良かったです。女性としての立振舞いは、普段の生活から常に気を配っていました。校内では、あちこちで明るい挨拶の声が聞こえます。先生と会った時はもちろん、直接関わりのない後輩も挨拶してくれます。挨拶は重要なコミュニケーション力に繋がります。また、挨拶する方もされる方も、お互いに気分がよくなる不思議な力がありますし、朝礼や授業の時は姿勢を正して挨拶をすると、メリハリがつきます。また、これらの学びの中でも、一番印象に残っているのは、キヤリアデザインです。入学式から校長先生にずっとキヤリアデザインについてのお話を聞いてきました。「自分は将来どんな生き方をしていきたいのか」を探し、一人一人が目標をもって過ごしています。私は、勉強面に特技を見つけたかったので、沢山の資格を取得することを目標としました。そして、そのためには、積極的に授業や講習で苦手なものをなくすように努力しました。特に講習は夜遅くまで行われ、途中で逃げ出しそうな時もありましたが、同じ目標をもつ友達と助け合って頑

張りました。その結果、私は様々な検定試験に合格しました。そして現在、胸を張って「私にはこれが出来ます」と言える自分がいます。

これらの経験を通し、就職について真剣に意識するようになりました。就職までの時間は意外と短いです。その限られた時間を有効に使うためにも、今まで学んできた事に決して満足することなく過ごしたいです。基礎学習を日々の習慣として自らの向上に努めたいと思います。そしてそれらを活かし企業の求めるような立派な女性社員として社会で役立つ人間になりたいです。

自分の誇れるもの

安田学園高等学校 電気情報科 二年

菊 地 秀 人

私が誇れるものは、電気・電子回路の実験に関する知識である。小学生の頃から電子回路に興味をもつた私が、たくさん雑誌や専門書から独自に学んだ知識である。

私は、小学生の頃から科学の実験に興味があり、科学の雑誌を読んでは自分で試してみようという気持ちになつた。また、様々な部品を使って組み立てていくことも好きだった。そんな私が小学生の頃に作った物は、デジタル時計や電源装置などである。自分で回路図を作り上げた。モーターや電流計などを作れる『電気に関する基本的な知識』があつてこそである。

中学生になって、ますます科学に夢中になつていつた私は、選択理科の授業において燃料電池やテスラコイルの製作に取り組んだ。人工的に稻妻を作り出せる「テスラコイル」の情報を探して海外サイトで見た時、稻妻の写真に感動を覚え、どうしても製作したくなつた。しかし、なかなかテスラコイルについての詳しい情報を集めることが難しく、設計することは大変だつた。稻妻を出すには「共振」という状態を作り出さなければならず、試行錯誤をしながらも製作していった。その結果、完璧なる共振とまではいかないが、とりあえず動作させることには成功し、無事テスラコイルを作り上げることができた。

私は、高周波、高電圧を発生させる特殊な変圧器であるこのテスラコイルから発する幻想的なコロナ放電に、とても魅力を感じている。上手く高周波になれば体の表面を流れてしまふため稻妻に触れることができる。近づけた蛍光灯も光らせることができる。このようなテスラコイルは、私が一番興味をもつて研究に取り組み、自信をもつて発表できるものの一つである。

中学時代には他にも、金属を溶接し、パルスジエットエンジンという種類の本物のジェットエンジンも作り上げた。これららの実験の結果については、自分のサイトに載せて公表している。なお、順を追つて詳細な解説を書き、実際に作ることはもちろんのこと、作ることができなくとも楽しめるコンテンツ構成を心がけている。この結果、サイトへのアクセス数が増えたため、実験に関するサイトを別に立ち上げ更新するようになつた。

主に高電圧やレーザー、ジエットエンジンなど、見た目が派手な実験を扱っている。たくさんのアクセスがあると、私はインターネット上で自分の実験に興味をもつてもらえることがとてもうれしく、ますます難易度の高い実験にも挑戦するようになった。

そして、現在では、私が行つている実験が認められ、様々な発表の場が与えられるようになつた。「M a k e」というイベントでは稻妻から音楽が流れる「歌うテスラコイル」や、残像で絵が見れる「レーザープロジェクター」の展示とプレゼンテーションを行つた。取材に来ていた月刊「アスキー」のカメラマンの方が記事に載せてくれた。また、BS2の番組「デジタルスタジアム」のスタッフにも声をかけてもらい、番組に出演することにもなつた。私が興味をもつて取り組んでいる電気や電子回路の実験が、多くの人々に認められたことがとてもうれしい。また、それ以上に、自分と同じ分野に興味をもつ人々と話をする機会が増え、意見を交換することができるようになったことがうれしく、私にとってよい刺激になつてゐる。

私が誇れる電気・電子回路の実験に関する知識は、これからも実験のサイト更新を続け、多くの人々に知つてもらうとともに、さらに深い知識を身に付けていきたいと思う。そして、将来は、電気・電子回路の知識を活かした分野を専攻する研究者、もしくは、エンジニアといった職業につき研究していきたい。

建築科で学べること

安田学園高等学校 建築科 二年

藤田康平

建築科に入学して早くも二年が経つ。

一昨年は待ちきれないほど建築の勉強をしたかった中三。

今では、とても幼く感じる。

僕は「勉強大好き」という人間じやないが、建築の勉強は大好きだ。

建築科に入学して一番大きかつたと思うのが、製図、模型、実習の肌に触れて学ぶ授業だった。要は、自宅学習ではできないもので、建築科が設けられている学校でしか学べない授業だ。これらの授業を学んできたことで、二年間で多くの資格を取ることもできた。

そう考えると、二年間だけでとても充実した高校生活が送られていると思う。

しかし、こういう利点もあるが、反面、不安を覚えたこともあつた。建築の専門科目があるため、普通科目数が少なくなるのだ。その事によって、普通科目の勉強内容は浅くなり、大学の一般入試は、とても受験するには厳しい状況に立たされる。だから僕たち建築科は、AO入試、推薦入試、指定校推薦しかないと思い込み、勉強する気もなくなり、テストは散々な結果だった。

そんな時、卒業生に大学での生活や授業内容を聞ける機会ができた。聞いてみると、先輩方はとても活躍しているよう

で、当時の僕にあつた不安が、徐々になくなつていった。二年後には、必ず先輩方のように自分も活躍していくたいという気持ちにもなつた。そして、今基盤となつていてる建築の勉強を中心につき、今やれることを確実に学ぶことを肝に銘じた。僕は、もう一度進路のことを考え直そうと思った。

二年半ばになつてから、「何事にも積極的に」ということを自分のテーマにした。何かに挑戦したくて、何か建築科での思い出を残したくて、このテーマに決めた。

初の挑戦は「製図コンクール」だった。放課後必ず製図室に行き、下校時刻まで製図台で黙々とやり、納得できる作品になるまでやつていた。それをきっかけに大学のコンペにも出品しようと思つてはいる。やはり自分から進んで何かに取り組むことはいいものだ。高校生活の間で、建築のことで何かを残したいという気持ちが溢れていた。人は本当に変わるのだつた。

高校生からこうやって勉強できることを幸せに思つてはいる。それに私立に通わせてもらつてはいるので、両親には心から感謝している。

建築科で勉強してきて成長させられたことがあつた。一つは、勉強とは全く関係ないのだが通学である。学校までの通学時間はとても長い。そのため起床時間が早くなるという問題があつた。僕は朝起きるのが、中学まではとても苦手だった。二つ目は感受性。昔の自分には見て学ぶ、触れて学ぶことが希薄だつた。三つ目は周りを見る視野。都内に出ると新しい発見があり、情報の収集の取り組み次第で周囲が見渡せるような感覚になつた。一つ目と三つ目は、建築科の勉強と

は直接関係ないと思うが、これから自分のためである一つの経験、試練を高校生の間で体験でき、とても自分を成長させてくれたと思う。

しかし、今の自分が知っている建築知識や技術などで納得してはいけないと思った。それは、前に書いた建築科の生徒による「製図コンクール」の入賞者の作品を見るとレベルが高く、技術力もたった二年間、三年間で培かつたとはとても思えなかつた。僕は思った。こういう人たちとは、周りの人の数倍も旧代建築、近代建築の情報や論理などを自宅学習しているのだろうと思った。少なくとも建築への関心は非常に高いだろうと思う。

僕は決めた。今日から毎日建築に関係することを考えたり、外出する時に周囲に目を向けて、建築物により意識を高めようと思う。もちろん建築の勉強も以前よりするつもりだ。

このように一つのことを集中して学ばせてもらえる建築科に通えて、僕はとても嬉しく思えるし、自分をもつと磨きたいと思ってる。

あと約一年半だけども、仲間と毎日楽しく過ごして、建築の勉強をはじめ、普通科目も精一杯力を入れていきたい。

